

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可  
令和八年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第二十四卷 第十一号（通卷二八七号）

# 万象

B A N S Y O

二月号

2026. 2



二月の句

水飲んでさて獅子舞のうしろ脚

内海良太

令和7年の俳句カレンダー1月を飾った恩師の内海良太名誉主宰の句。幼い頃見ていたお正月の獅子舞の様子が「さて」の二文字に凝縮され、情景が思い出される。特に目立たないうしろ脚の人の苦勞も偲ばれ、何とも嬉しく晴れがましく毎日眺めておりました。昨年1月も終りに近づいた26日、まさかの訃報に言葉を失い、今も信じられない思いです。

一周忌を迎え、感謝と共に、改めてご冥福をお祈り申し上げます。  
(喜多恭仁子)

令和八年

二月号

# 万象

BANSYO

死んだら  
葬儀屋も嘆き悲しんでくれるくらいに  
一生懸命生きよう。

マーク・トウェイン

# 万 象

令和8年2月号

主宰作品 年惜しむ ..... 江見悦子 4

万象の窓④7 阿波徳島へ ..... 江見悦子 5

名誉顧問作品 大 綿 ..... 小林愛子 6

## 風音集

中村千久・福島せいぎ・柳澤宗正・中條睦子  
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中愛子  
榎本文代・神田美穂子・井村和子・前田貴美子 ..... 7

風音散歩③⑨（二月号） ..... 小林愛子 10

## 同人作品

江見悦子選 ..... 11

同人作品の佳句 ..... 江見悦子選 31

同人会だより 同人名簿についてのお願い ..... 万象同人会 32

12月の「万象」オンライン同人句会高点句

会計からの連絡 ..... 万象俳句会会計・同人会会計 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞（十二月号） ..... 榎本文代 34

石路の花 ..... 桔梗純 36

記紀の道 ..... 中山芳教 37

## 同人特別作品

特別作品評（十二月号）…………… 萩野加壽子 38

私のこの一句…………… 加藤 季代・高橋 ひろ・成瀬真紀子・宮崎知恵美 39

続・風のしをり<sup>②⑥</sup> 子規の写生論の展開（三） 高木良多…………… 編集部 40

万葉の抒情<sup>③⑩</sup> 『万葉集』にたずねる抒情の源流<sup>③⑩</sup>…………… 橋本 清 41

万象ノオト「コンビニ」…………… 杉山 巳代・高山ひさ子・請問ゆかり 42

杉山 和廣・神田美穂子・中村 千久  
巻頭作家（一月号）プロフィール 高野翠子（東京）…………… 佐藤 和子 44

万象作品 江見悦子 選…………… 45

珈琲ぶれいく<sup>⑥⑨</sup>…………… 45

万象作品の佳句…………… 江見 悦子 56

新中央句会報（11月例会）…………… 58

北から南から ひむか宮崎（宮崎）…………… 中山 芳教 61

「他誌管見」（俳誌「たかな」11月号より）…………… 62

ルビーの小函（二月号）…………… 編集部・校正担当 63

東西南北…………… 64

年惜しむ

江見悦子  
(主宰)

白鳩の翔つや舞ひ散る楡黄葉  
昼時の都電混み合ふ冬うらら  
うす青き眉山や冬の靄晴れて  
鼻緒赤きお鶴の木偶や冬ざるる  
花らつきよ畑の向かふは海の青  
冬潮の渦巻く鳴門底ひまで  
欣一の白鳥の匂に年惜しむ

阿波人形浄瑠璃

## 阿波徳島へ

江 見 悦 子

「風」の流れを継ぐ「万象」の俵誌の一つに、「なると」があります。昨年秋に「なると」創立50周年・550号記念」の俳句大会・祝賀会が開かれました。今年創刊25周年を迎える「万象」にとつてみれば、倍の年数にわたって活動されてきた大先輩の結社です。「万象」顧問をお願いしている主宰の福島せいぎ先生、奥様である副主宰吉美さんには、今まで「万象」に多大なご尽力を頂きました。何はともあれお祝いに参上したいと、阿波徳島の地を踏みました。

阿波は徳島県の旧国名、県都の徳島市に「なると」の発行所、万福寺があります。11月23日大会当日の朝、悠悠と流れる吉野川の男ぶりと冬鶺の晴れた眉山の女ぶりに迎えられました。

「なると」創立50周年、550号とは只事ではありません。せいぎ先生の「風」入会が25歳の時、同年に万福寺の第32世住職に就任され、その後20数年は高校教師としての勤め。そんな超多忙の二代目主宰の重責を担って38年、目出度くこの日を迎えられました。

小春の日、43名が集まった会場は鮮やかな花に満ち溢れ、せいぎ主宰のご挨拶は「出会いの神様のお蔭で出会った縁を大切に」「その縁を良い運に変えることで人生が開ける」「俳句はまさにそれが実現できるもの」と、いつもの朗々たるお声で連衆に元気を届け励まされました。

記念講演、祝舞と進行し、俳句大会が始まる頃には終始和やかな笑いに包まれ、「阿波人」の明るさと乗りの良さに感心しました。

翌24日、創建1200年と伝えられる名刹万福寺に伺いました。寺宝の並ぶ境内で特に印象に残ったのが樹齢50年の黄葉した枝垂れ梅。太い枝が盛り上がって参道まで垂れ、美しく大きな黄葉が散り継いでいました。春には白梅が盛り見事な梅干が出来るそうです。その名木の裾に祖父福島里津城氏の句碑（「膝抱りて秋の雲見る真昼哉」と、父正人氏の碑（陶板に焼かれた彼岸花の写真）が据えられ、せいぎ先生と吉美さんの人生を守り、応援しているかのようでした。

「万象」会員の皆様にもお会いでき、心に残る二日間に感謝して阿波徳島の地を後にしました。

大綿

小林愛子

(名譽顧問)

ふくろふや色づく森の料理店  
梟とカーク・ダグラスの鼻筋  
梟のねむたき瞼落ちかかる  
箸止めて紅葉いよいよ濃かりけり  
追ひ越してゆく大綿のふと青き  
ジョン・レノン忌日を熊の眠らずに  
妙義山に火の手廻りぬ開戦日

深眠り

中村

千久  
(編集人)

熊

柳澤

宗正  
(顧問)

柚子浮かぶ薄暗がりも道後の湯  
水軍の島重疊と冬風げる  
霜の夜サテイいざなふ深眠り  
花八つ手打ち棄てられし外厠  
暮れてなほ狭庭に石踏の花あかり  
冴ゆる夜やルーペに映る旧字体

落葉搔中のひと葉に手を休む  
山火事のくすぶる煙村時雨  
宝くじ買うて夢見る師走かな  
アルプスを背に古城の煤払  
熊の字の墨書掲げて年暮るる  
錫杖を闇に響かせ除夜詣

綿虫

福島

せいぎ  
(顧問)

冬

深

中

睦子  
(同人会会長)

綿虫のたましひあをきものまとふ  
あたたかき十一月の渦笑ふ  
逆潮や冬日吸ひ込む渦の底  
十夜婆首に真珠のネックレス  
重ね着の導師となりて水こぼす  
火の恋し人肌恋し林住期

裸木にひかりを注ぐ北斗星  
いういうと猫の出はいり隙間風  
能登檜葉の濡れてゐるなり籠の牡蠣  
大正の硝子の歪み冬紅葉  
時雨の灯照らし出したる地獄絵図  
過去帳の字も代替はり冬深む

冬 満 月

松原智津子

(北海道)

冬日差扱びつつ行く松林

雪囲終りは夫の遺髪塚

凍道をペンギン歩きのもどかしさ

薄雲のべール外れし冬満月

ともかくも独り身呑気年の暮

冬 落 暉

亀田やす子

(栃木)

スカイツリーの影のかぶさる墓参かな

子の声の消えし砂場や冬紅葉

冬落暉うすもも色の雲残し

草を引く白鳥の首伸びる伸びる

枯蓮の水面に檻樓をぶら下げて

長 元 坊

沢辺たけし

(千葉)

石鯛の縞くつきりと冬に入る

潮風のつつむ梯梧の帰り花

時告ぐる鐘の余韻やいてふ散る

長元坊黒き眸にビルの群

引堀へ山茶花散れり鴨場跡

大 綿

吉中愛子

(東京)

レントゲンに胸の張り付く波郷の忌

大綿のゆらめきのほる摩天楼

薔薇園の眩しかりけり冬の黄は

短日の缶に森永ビスケット

肩振つてジャズに酔ひたり年の暮

浮寝鳥 榎本文代

(神奈川)

釣り人の馬穴をのぞく小春かな  
首立ててまつすぐに来る大白鳥  
浮寝鳥離ればなれに川暮るる  
遠ざかる下校のチャイム雪螢  
きんぴらの辛く煮つまり日の短か

猫の昼 神田美穂子

(静岡)

室の花出窓は猫の指定席  
茶の花のぼろりと猫の通ひ道  
猫の昼ここら落葉の吹き溜り  
小春日や猫全身を伸ばしきり  
思慮深き眼をして猫や月冴ゆる

冬の虹 井村和子

(石川)

五箇山の溪へ落ち込む冬の虹  
歳の市四つ身の晴れ着吊るし売る  
マスクして三味の皮裁つ諸刃かな  
振り向かず行かばや除夜の広小路  
天金の一書と籠る炬燵の間

冬に入る 前田貴美子

(沖縄)

冬に入るスूपにスプーンすべらせて  
石を蹴る遊びに暮れて冬木の芽  
水暮れて水鳥の白流れけり  
海漂林の夕日しづくや浮寝鳥  
人悼み風に傷みて冬の月

# 風音散歩

③9 (二月号)

小林愛子

綿虫のたましひあをきものまとふ 福島せいぎ

綿虫は、体長約2ミリ。空中に青白く光りながら浮遊する。これに触発された「たましひ」であろうか。作者は導師、仏教を説いて衆生を悟りに導き、葬儀の主となって引導をする僧侶であれば、草木・動物・人・無生物などの個々に宿つていとされる超自然的な存在としての精霊を指すと思われる。掲句の「あをきものまとふ」は感覚の冴えで句の眼目、言いで得て妙である。(綿虫にあるかもしれないぬい心かな 川崎展宏)

天金の一書と籠る炬燵の間 井村和子

炬燵は家庭用の暖房器具の一つ。切り炬燵と置き炬燵とあり、後に電気炬燵が主流となった。ここに入るとぬくぬくと気持ちよく、出るのに決心がある。炬燵の間のある家である。抱えてきたのは天金の書、本の上方の小口に金箔を張ったもので、洋装本や貴重本に多い。「一書と籠る」つもりでいそいそと。本好きにとつての極楽の時間が待っている。

長元坊黒き眸にビルの群 沢辺たけし

長元坊は、ハヤブサ科に分類される鳥の一種。この科で鳩サイズなのがハヤブサ、鳩サイズで翼や尾の長いのが長元坊。

「黒き眸にビルの群」、年々都市化する猛禽類である。長元坊もビルを崖に見立てて繁殖、可愛い眸の視力は紫外線を識別して捕食を容易にする。熊もびっくりの遅しさである。

レントゲンに胸の張り付く波郷の忌 吉中愛子

レントゲン撮影となった。「胸に張り付く」とあるのは緊張のため力が入りすぎたのか、漠然とした不安感を表す。「波郷の忌」への連想、取り合わせはごく自然である。波郷は結核という病魔に苦しんだ。(今生は病む生なりき馬頭)。掲句は一見、二つの概念を対置させるといふ二句一章のように見える。しかし切断が見られないので一句一章であろう。

猫の昼こころ落葉の吹き溜り 神田美穂子

一連の猫の句の一つである、家猫に違いない。たつぷりと食事すんだ。猫は気ままな動物、あとは足まかせ恋まかせでさ迷い歩く。時に「落葉の吹き溜り」に眠ることも。切れの後の「こころ落葉の吹き溜り」の、殊に「こころ」の出だしがよい。一句に動詞はなく言葉が選ばれている。

草を引く白鳥の首伸びる伸びる 亀田やす子

白鳥はガン目カモ科ハクチョウ属の総称。日本に越冬飛来するのは大白鳥と小白鳥、全身純白で大きく、首が長く優美な姿である。(白鳥の首やはらかく混み合へり 小島健)。優美な白鳥も生きるため、食べたり争ったりする。何のためか、草を引くときの首が伸び放題というのがおかしい。

# 同人作品

江見悦子選



札幌 岡本敬子

妖獸の為業とされし鎌鼬  
公孫樹ちる美しき中なる句会場  
柿六つ干し青空と交信中  
落穂のこす貧者のためと教はりし  
通学路このまま根雪になりさうな

札幌 林陽子

山粧ふ奥へじぐざぐ電車ゆく  
冷やかや山の神すむ古社  
秋冷や湖にすつくと赤鳥居  
秋嶺を背に楽しや黒たまご  
海賊船釣瓶落しの日の中を

札幌 落合裕子

敗荷の重なり合へる鄙の湯屋  
椋鳥の群吸ひ込まれたる一位垣  
暮れてなほ窓を離れぬ蜻蛉かな  
亡き友の家は更地に秋の風  
浅眠り未明の窓の稲光

札幌 濱谷和代

街路樹の一樹の銀杏初もみぢ

小気味良き鉄の音や秋手入れ  
ヨーヨーマ繰り返し聴く良夜かな  
時雨来る空の暗さのまたたく間  
峰といふ峰を残さず初雪来

※ヨーヨーマ……中国系アメリカ人のチエロ奏者

札幌 大内 和憲

ねんごろに白息の手が清拭す  
のろけ聞く往診果てし懐手  
なんの蔓からむや枯れの司祭館  
鮭を打つ一打一打の音重く  
時計台の音冴えわたる冬青空

札幌 紅露 恵子

行く秋のカフェ薄暗し古時計  
虫喰ひの目と鼻と口木の葉散る  
それぞれの木肌にぬくみ枯木立  
身ほとりを即かず離れず雪螢  
まつすぐに育つ白樺冬青空

札幌 大内 マキ子

初雪や顔寄せ合ふ子ひとつ窓  
ふんだんに荒縄使ひ冬構  
舟板で作る番屋や冬仕度

白鳥の浮寝の羽の吹かれたり  
踏み応へなき新雪を蹴り歩き

札幌 中鉢 弘一

かさこそと枯葉の中の雀どち  
冬の湖利休ねずみの色となり  
対岸の水面に孤影白鳥来  
爛酒や匂ふ宗八一夜干し  
妻の嘘どこか優しき小春かな

札幌 北浦 詩子

一面の雲の重たき十一月  
雲切れて一片の彩冬の虹  
鱈捌く出刃包丁のぎこちなし  
銀杏散る中を進めり装甲車  
新しき香満つる仏間畳替

江別 佐藤 哲

川のみが村つなぎけり大枯野  
蕎麦刈れば渺渺大雪山のあり  
新米の香り手首に掬ひけり  
熊撃ちと長湯をしたる野分かな  
虎落笛聞きつ湯船をあふれさす

丹頂に逢ひしよ里は深眠り

江別 太田 佳美

羽後の旅刈田の中の滑走路  
運動会応援席に大漁旗  
十勝産の太き一本とろろ汁  
煉瓦道まるぶ団栗踏まぬやう  
朝まだき凍道急ぐ黒き影

新潟 高橋 ひろ

冬夕焼日のかたまりの弥彦山  
二日とは続かぬ晴や十二月  
涙拭く手袋の指さりげなく  
二礼二拍手手袋はポケットに  
猫じやらし枯れ遊び手も居なくなり

新潟 高野 松風

名月やひと筋よぎる翼の灯  
秋夕焼田をすれすれの鳥つぶて  
佐渡の灯はたしか向かうよ星月夜  
ついでば枝ごと沈み実むらさき  
手秤に冬瓜選るや二つ三つ

益子 光岡 れい子

遙けき日曾祖父ちやんの早稲の飯  
マンドラの深き音色や暮の秋  
白鳥来水面たちまち生き返り  
縫ひ上げて背中ほんはりちやんちやんこ  
たまゆらの風のいたづら降る紅葉

芳賀 大村 かし子

枯葉舞ふ玄関の前吹き溜り  
秋草をバケツ十個に道の駅  
仏壇に賞状飾り文化の日  
短日やシルバーカーの長き影  
食卓に煮麺匂ふ今朝の冬

宇都宮 阿久津 勝利

鏡阿寺の軒の雨垂れそぞろ寒  
墳丘の松に菰巻く八溝晴  
丸窓の障子に映ゆる照葉かな  
秋寒し鴉入り日へ帰る頃  
乱筆の値引きの札や秋の暮

栃木 上岡 佳子

蝶ネクタイ抹茶をはこぶ文化祭

雀にも新米置くや朝の庭  
銀翼の音を置き去り鱗雲  
銀杏落葉芭蕉の句碑の明るかり  
秋灯下夫の遣せる古賀メロデー

佐野 増田 幸子

多賀城趾野菊の色の香り立つ  
日溜りの屋敷稻荷へ冬の蝶  
ハイウエーの裾ななかまど赤を引き  
影重ね辛夷黄葉の落ちにけり  
鳩の足枯葉をすこし除けながら

佐野 加藤 季代

秋燕の目差すは谷中遊水地  
眠りゐる猫驚かす一葉かな  
凍蝶か枯葉か畦に吹かるるは  
白鳥の来て沼ひとつ明るうす  
一羽とて零さぬ大樹神還る

佐野 阿部 澄

水の秋切つ先揃ふおかめ笹  
裏門の門堅し棗の実  
マラソンの子へ鶴の声盛ん

背伸びして母が佗助剪りくれし  
小春日や賓頭盧さまの黄の衣

佐野 芝宮留美子

秋の蝶もつれて川を渡りけり  
草紅葉川原明るく広がりぬ  
信濃柿しだるる枝に押し合ひて  
浅葱斑はや秋空へ消えにけり  
今朝もまた啄木鳥の音雑木山

佐野 島田 和枝

菜園場の低き茶垣の花さかん  
初時雨鏝阿寺へ行く石畳  
魚光る朝寒の川投網打つ  
また一つ言葉忘れて十三夜  
石落咲くや潮騒の径灯台へ

佐野 売野 緑

校倉の堅き錠前銀杏散る  
鳩も鯉も鴨も寄り来る太鼓橋  
月を観てより芒の穂刈りに行く  
蒲団干す長きベランダ鳶の笛  
校長の踏み込んでゐる落葉籠

佐野 店 網 洋 子

泡立草大きく揺るる休耕田  
秋天へ夫の眼帯はづしけり  
庭に咲く黄菊白菊仏壇へ  
逆さ川の水音かすか照紅葉  
起き抜けの窓初雪の遠き富士

足利 大 木 茂

竜田姫送る鼓笛の日もすがら  
銀杏の不意に人打つ札所寺  
しぐるるや鉄扉の奥に大使館  
夕鴉葬家の熟柿奪ひ合ふ  
ヴィオロンの長き独奏暮早し

土浦 澤 照 枝

羽根付きのドレスの赤や七五三祝  
薄暗き店先に買ふ太鼓焼  
十一月子神は里の宮に在す  
御座替の急坂登る冬宮へ  
皮剥げば葱の白肌うつくしき  
飯桐の実鳥呼ぶ色となりにけり

加須 茂 木 弘 子

コスモスや遠き男体山雲に浮き  
鑊阿寺の鯨鉾烟る秋の雨  
柿紅葉水無川へ吹かれたり  
みちのくや野萩の垂るる切通し

さいま 山 本 右 近

庭石となりし石臼十三夜  
浮雲の集ふ菊坂一葉忌  
高原に祝婚の鐘紅葉濃し  
咲くやうに小さき冬蝶草の上  
超高層ビルは人の巢暮早し

所沢 三好かほる

あさぎまだら翅を休めて藤袴  
古書市に選ぶ浮世絵文化の日  
初雪の山裾めぐる貨車の音  
をちこちの戦の止まず神の留守  
冬に入るインド更紗の赤赤と

所沢 南 雲 秀 子

浅間山すつきりと晴れ暮の秋  
黄葉の大銀杏背に多宝塔  
犬連れて茶の花盛る畑抜くる

葱畑続く入間野鳶舞ふ  
賜りし隣家の小菊仏壇に

千葉 田中道江

カストリとある品書や鳥渡る  
雑木林落葉踏む音変はりたり  
御遠忌の空の深みや小鳥来る  
銀杏落葉吉備津神社の黄金色  
小春日や路地の奥まで潮の香

千葉 松浦陵保

紅葉映ゆ琵琶湖へ通ふ水路閣  
鬼子母神櫓並木の落葉掃く  
水澄みて湖岸に映ゆる砂紋かな  
茸汁南部鉄鍋滾りたり  
草鞋編む祖母の内職夜の土間

千葉 喜多恭仁子

柿たわわ育てし主の一周忌  
佳き知らせ有りぬ今宵は十三夜  
小春日や術後二年のモンブラン  
冬仕度素つぴんのままひと日過ぐ  
菊の香の満つる仏間の古畳

千葉 大月玲子

末枯の草の先より風生まる  
貝塚に古代の記憶木の実降る  
カフエラテの泡ふくふくと小六月  
冬めくやロールキャベツを煮込む音  
海峡に天使の梯子神の旅

佐倉 大内佐奈枝

冬めくや猫の擦り寄るふくらはぎ  
きつちりと槽に沈めり新豆腐  
糴の穂細ほそと出て日の匂ひ  
白鳥を迎へむと田の水静か  
乗り継ぎのバス逃したる夜寒かな

佐倉 三屋英俊

廃校の壁に寄せ書き小鳥来る  
抱き寄せて猫と夜寒を分け合へり  
土間に薪積んで坊守冬に入る  
神送り鎮守に足袋と米五勺  
吊るされて熊潤む目を遠山に

佐倉 横川良子

ガザの子に何の咎あり冬の月

冬めくや暖簾褪せたる佃煮屋  
野良猫と暫し軒借る初時雨  
踏みしだく音を樂しみ落葉道  
団栗を確しづかと握る紅葉の手

四街道 奥 太 雅

蟻螂の頭より枯れ始めたり  
野に開く手紙に來り赤とんぼ  
その場所は誰にも告げず鳥兜  
携ふる御結びいくつ神の旅  
鉄の爪摘む一棟時雨雲

四街道 塗 木 翠 雲

減便のバス待つ客やそぞろ寒  
のけぞつて見上ぐる空や竹の春  
雨音に金木犀の滴落つ  
秋蝶の薄き影さす出窓かな  
天守なき外壕占むる冬桜

船橋 山 下 良 江

立冬の大海原へしやち跳ぬる  
ガラス戸のすきより生まれ冬の風  
家々の窓ひつそりと冬に入る

山茶花のこぼれんばかり花つけて  
枯庭に花石路上ぐる日和かな

船橋 赤 堀 洋 子

コスモスも朝は日に向き小さく揺れ  
くちなしの赤き実鴉食みこぼす  
青空へひとすぢ伸びて冬の薔薇  
地藏尊桜落葉を頭に載せて  
頭を下げて百日紅の実の重し

船橋 久 保 村 淑 子

二羽の鶴三羽になりてけたたまし  
冬に入る三段跳の高々と  
冬の影まとふ黒松林かな  
もう一つ冬の川にも夕日かな  
重なりてすれ違ふ雲冬の月

船橋 片 桐 帆 一

足の裏冷たき朝や親父の忌  
マイナカード三分写真の木の葉髪  
満目の櫓田全て印旛の野  
体育の日鉄棒ひかる逆上がり  
浅間路に秋冷至る入り日かな

船橋 宮本加津代

捨てきれぬもの身に重し秋の風  
牡蠣焼けば広島の潮吹きにけり  
人住まぬ家すさびゆく寒さかな  
日の匂ひ放ち咲き初む石路の花  
小刻みに冬の来てるる空の色

船橋 中嶋久登

蒸饅頭妣の片仮名レシピかな  
山眠る馬柵に匂ひの残りたる  
山眠るがさがさがさと獣道  
冬めくや赤子の声のよく通る  
冬晴や喜寿の足跡波に消ゆ

柏 山本とく江

日差し追ひ日差しに憩ふ秋の蝶  
初鴨のまだ群解かぬ眠りかな  
湧き水の湯気より立てり雪螢  
病む窓に射し込む日差し冬に入る  
菊膾添へて一人の夕餉かな  
小春日や触るる墓石に師の温み

柏 内田郁代

欣一忌近し朋友集ひたる  
この地球に最接近てふ月青し  
鉄瓶の白湯の甘さよ冬初め  
黒煙を吹き上ぐ勢昼の火事  
着替への間殊に賑やか七五三祝

柏 古川京子

蠮螋の蠮螋を食む月の影  
牧帰り草やはらかに立ち上がり  
新蕎麦やにはかに冷ゆる山下る  
野紺菊ひとつと手向け墓仕舞  
芹鍋の湯気は地酒のかをりかな

流山 穂莉照子

月光に外す真珠のネックレス  
朝露や夜明けは星を眠らせて  
コスモスや子供はすぐに走り出す  
初鴨のゆるやかに描く線と円  
いくつものドラマ改札口に冬

市川 奥澤よし江

天高しソーラン節の力瘤

白雲に届く喚声運動会  
熟れ柿の今朝食べ頃と鴉鳴く  
栗飯の仕込みで今日は仕舞ひけり  
振舞は大皿に盛る金目鯛

東京 名和政代

山越えて来し鶴に播くパンの屑  
漱石の明暗を読む夜長かな  
日本橋は日本の標冬景色  
米粒を残さぬ夜食冬籠  
木枯や持て余したる乾電池

東京 藤田裕子

次のバス一時間後や野紺菊  
酌み交はす泡盛秋の宴闌けて  
小春日や障子の棧にうす埃  
額までかむる蒲団の日の匂  
赤黒き空峙へと椋鳥の声

東京 島野ひさ

カレンダー二枚となりて今日立冬  
大川端歩きなつかし一葉忌  
大根を煮て独り身の一週間

評判の映画満席年つまる  
さつまいも蒸して天麩羅母の味

東京 加賀葉子

冬の蜂庇の奥に引き籠もり  
干蒲団に五体ひらくや無我となり  
痴話喧嘩雑炊吹きて治まりぬ  
しぐるるや傘せり上がる太鼓橋  
寒椿の種三つに割れ飛び出せり

東京 久留島規子

セーターを一枚足して旅靴  
熨斗袋買ふ大安や秋日和  
パンケーキふうはりふはり文化の日  
朝市の野菜重たし初時雨  
大噓三つ残して早寝かな

東京 下嶽孝一

木の実踏み足裏に残る硬さかな  
この道も空き家明き地に秋の風  
風の音まじる瀬音の冬めけり  
鯉ひたと静まりてゐる夜寒かな  
婚決めし二人来てをり秋日和

木枯の吹き散らしてや空真青

東京 草間三香子

ロボット犬はなし上手や文化の日  
消灯の早き病棟大きくさめ  
大鴉猛る庇や万年青の実  
廃校の穂草に風のさやぎたる  
店頭に番茶焙ずる暮の秋

東京 岡村純子

静脈に靴下の圧冬の朝  
早朝の赤い山茶花葉陰より  
懐かしき祖父の焼芋釜据ゑて  
鯛あらの旨し目玉のまはりこそ  
十六夜の雲を祓ひて神々し

東京 桑原優美子

少年の深く息吸ふ今朝の冬  
投薬を待つ間の釣瓶落しかな  
ぼこぼここと珈琲の沸く小春かな  
やはらかく踏みゆく銀杏落葉かな  
行く秋やとんと出番の無きネクタイ

東京 三村紀子

境内に晴れ着の犬の七五三  
曇天の日こそ明るき石露の花  
緑青の屋根の勾配銀杏散る  
聖獣の護る正殿銀杏降る  
紅葉濃し香煙まとふ愛染王

東京 小池清晴

凧や息する度に増す痛み  
指を噛む蠶郷土に放ちけり  
大輪の菊の真白の解れゆく  
積み上がる葉の袋年の暮  
処置室のベッドで仮眠秋の暮

東京 一由久美子

黒門の太き門 蔦もみじ  
日めくりの影うすうすと冬来る  
初しぐれ玄関狭き子規の家  
病牀六尺引き紐長き冬ともし  
賑はひの上野の山の社会鍋

武蔵野 砂地宏子

靴下を脱いであんよの小春かな

小さき駅ホームの先の雪の富士  
君ゆきし朝や山茶花咲きそむる  
枝にそふ空の形や櫻枯れ  
残業の帰路の友なりオリオン座

齋藤 松井 宣夫

あと一杯終電逃す猿酒  
しぐるるや駅に佇む托鉢僧  
味噌焚や小さき手と手加はつて  
渋滞の車に釣瓶落しかな  
朽ちかけし田んぼ地獄に秋の風

立川 正田 華子

枯蓮の池の底ひに水動く  
枯葎崖には崖の匂ひあり  
短日の膝に畳めり濯ぎもの  
生垣に翅小刻みに冬の蝶  
山茶花やお砂場の砂入れ替ふる

町田 広瀬 俊雄

欣一と綾子の墓や吾亦紅  
秋陰や甲府盆地に煙立つ  
中山道奈良井の宿の濁り酒

野沢菜を貪り食ぶる猿の群  
橡の実の転がり落つる太鼓橋

町田 桔梗 純

白雲の描く巨大絵秋澄めり  
二夜の月雲抜くるまでそはそはと  
冬紅葉松の大樹の裾埋め  
銀杏の上に銀杏の落葉かな  
朝時雨鳥の鋭き声遠ざかる

日野 喜多尾 明子

秋蝶の黄や草の上を浮き沈み  
留守宅に庭師来てをり小六月  
柚子挽いで呉る垣根の長話  
座りこむ犬を促し暮の秋  
わが歩み夫に遅るる鴟日和

横浜 西本 才子

鉄鍋に湯気あがりけり鯛大根  
空き家に朝日差し込む実南天  
靴並べつぎつぎ磨く今朝の冬  
せせらぎの岸に靡けり草の花  
ゆるやかに野川曲がれり草紅葉

横浜 大橋 雅子

赤と黄の千両色付く日和かな  
人力車降るる兄弟七五三  
参道に銀杏を炒るからからと  
いつの間にか写真は母似石路の花  
杖つきて歩める幸や冬堇

横浜 三木 豊子

菊膾退院祝ふ朱の椀に  
煮凝や姉の残せし割烹着  
束の間の夕日に染まり木守柿  
夕さりの茶室の露地や石路の花  
杖つきてぎんなん踏んで退院す

横浜 星野 信子

雲去りて火球駆くるや十三夜  
秋空を震はせ去ぬるオスプレイ  
久方に父を想ひて秋刀魚食ぶ  
謎解きの糸口探る夜長かな  
母の忌はとほに過ぎしよ衣被

川崎 大久保 進

卓囲む健康麻雀文化の日

灯に赤き東京タワー暮早し  
山眠る罨に何やらものの影  
石庭の鳥影幾つ古都小春  
ペン立てに交じる耳搔き冬ごもり

鎌倉 恒川 清爾

冬構女庭師も地下足袋で  
やや遅れ点る門灯初時雨  
寺町に洩るるバイエル冬紅葉  
紅葉散る病自慢の同窓会  
冬の虹妻認知症との電話

伊勢原 佐藤 和子

赤松をがんじがらめに蔦紅葉  
どんぐりの小径足裏にカチカチと  
枯蓮田富士の夕日が真正面  
小狸の丸き顔出す土管かな  
冬の夜のあちこちで鳴る電子音

静岡 大村 峰子

逝きし人偲ぶ朝の雪螢  
山茶花の白に大粒昨夜の雨  
山椒の枝に刺しあり鶉の贅

うからやから来さうな気配おでん煮る  
落葉踏む一人の音の山路かな

静岡 宮崎 知恵美

夕暮に懸巢の騒ぐ神の杉  
実むらさき赤子の五指の触れてゆく  
句碑の背に芒孔雀のごと開く  
女郎花草刈る人の残しゆく  
臭木の実ままごとの子の髪飾り

静岡 望月 敏男

花野よりドローン飛ばす測量士  
里芋を抜くや大地に百の穴  
餓鬼大将稲架に跨り号令す  
バケツから盥に移す今日の月  
ギヤマンの皿に主役の栗ご飯

静岡 藤原 千代子

泥の稲鎌で起こして刈り進む  
稲干すや弟が運び兄が掛け  
自転車に頬張るバーガー夜学生  
猫の鈴よく鳴る日和吊し柿  
濠端のジョガーの息や冬来る

静岡 萩野 加壽子

やはらかに人の影置く草紅葉  
秋深む死者の蔵書に囲まれて  
反芻の牛の涎や秋の昼  
一枝に風の弾力鵲高音  
時きざむ如くに木の実落ちにけり

静岡 小川 明美

男つぶりの奴付け髭帯祭  
馬方に鼻寄する馬秋祭  
点眼の一滴の海涼新た  
白放ち我を誘ふ毒きのこ  
掃苔へウイスキーもてワインもて

静岡 藤本 節子

重たげに揺るる数珠玉沼の昼  
そぞろ寒夜通し疼く注射痕  
軽トラに足で踏み込む今年藁  
霜降やつるりと剝けて茹で卵  
群青の雨後の富士山十一月

静岡 大長 文昭

秋鏗いぶす八雲の散步道

※八雲……小泉八雲

七輪に腰をかがめてこはだ焼く  
味噌蔵に麴匂へり小六月  
ななふしの落ちてもがけり寺の門  
万両や重機どすんと屋根壊す

静岡 加山ひさ子

秋晴や畳に揺るる竿の物  
入稿を終へて酒酌む夜長かな  
輝ける波の鼓動や十一月  
ボール蹴りボール追ひ掛け大刈田  
文化の日ハムカツ揚がる総菜屋

静岡 石川裕子

飯に炊く庭の零余子をひとつかみ  
病癒え夫新米に声発す  
屋敷畑の芥に紛れ秋の蛇  
指細き耳鼻科の老医室の花  
外流しに薄き石鹼空つ風

静岡 本多ひとみ

予科練の碑に冬菊の溢れをり  
畦にひとつ小指の丈の冬蒲公英  
雪覆ふ宝永山の麓まで

捨畑の隅から隅へ枯れにけり  
一発の銃の銜や獵解禁

静岡 杉澤修

秋麗や水の三島に小半日  
百本の紅葉且つ散る神の庭  
新松子こぞりて伊豆の一の宮  
行く秋の霊峰藍を深めけり  
留守詣水の都の大神

静岡 松永博子

蓮台の漆のくすみ柳散る  
ハンゲルの碑文けざやか花木権  
あてのなき道木犀を曲がりたり  
穴惑ひ艶そのままに果てにけり  
ビーズめく雨の雫や箒草

射水 成瀬真紀子

海風や掛稻軽き音立つる  
数へむとするに初鴨みな動く  
搾乳へ牛を呼ぶ鐘鱒雲  
伏す母の耳聞き留むる初時雨  
細やかなキーンのと文字冬灯

※キーン……トナルド・キーン

金沢 今越みち子

向う岸へ届かぬ落葉川波へ  
桜もみぢひらり羅漢のひざ許へ  
白峰や農家の庭に桑括る  
藁屋根の影の三角冬たんぽぽ  
鐘楼へさす日矢の中雪螢

金沢 伊藤美音子

乳色にあけゆく空や雁の声  
古着屋に冷かしの客秋暖簾  
冬瓜汁すすする米寿の喉仏  
曼茶羅に一灯明や秋の暮  
こほろぎの根城にしたる無縁墓  
消息のつかめぬ友や雁渡る

金沢 高田たみ子

墓石のずれそのままや冬来る  
講の寺白磁の花器に梅もどき  
梅の木の根元に返す落葉かな  
大学の解体遅遅と散る紅葉  
投函へ回り道する小六月

金沢 豊田高子

日を透かし風を透かして紅葉散る  
引き絞る弓の気合や鷹渡る  
ずわい蟹釜の湯気噴く近江町  
味噌買ひにだらだら坂を一葉忌  
霜晴をゆるり滑空グライダー

金沢 松井佐枝子

豆腐屋の喇叭軽らか鯛雲  
栗飯や揃うて喜寿の古馴染  
しぐるるや一軒となり和傘貼る  
銀杏落葉久弥の里へつづきたり  
代代の廟へ石段枯葉舞ふ

※久弥……深田久弥(山の文学者)

金沢 石川純子

城跡に走り根の艶秋の暮  
獅子頭かつぐ若衆紅葉晴  
通り行く人の小走り十一月  
冬浅し船べり光る水陽炎  
遠白山冬青空に手をかざし

金沢 河野尚子

包丁研ぐ鋼の匂ひ秋深し

明日開く蕾の尖る冬薔薇  
渦に来て雲を散らせる小白鳥  
奥能登の間垣繕ふ冬近し  
俱利迦羅の奈落を包む葛の花

金沢 道場 啓子

真ん丸に刈り込む庭木秋麗  
大乘寺こぼるる萩に深呼吸  
秋深しポールモーリア聴く夕べ  
暮早し子の影伸ぶるサッカー場  
冬日差溢れんばかり大公孫樹

金沢 杉本 年虹

マニキュアは黒やかほすをしたたらせ  
輕輕ととんぼ切る児や秋うらら  
スカートのひらと堀越え赤のまま  
くろがねのD51の錆文化の日  
拝殿へ鳥居は三つ鳩の声

金沢 南 恵子

牛飼の藁持て触るる草の花  
秋しぐれ陵守は昼灯す  
用水の流れの早さ秋闌くる

珈琲を濃く淹れ秋を惜しみけり  
屈伸の手指の動き冬に入る

金沢 松下 信子

少年の頬に生傷野分晴  
無住寺の水音幽かや月今宵  
木犀や軽く会釈を交はす路地  
色鳥や市場に出入口いくつ  
一通を投函釣瓶落しかな

金沢 北川 禮子

浮世絵の紺青放つ秋気かな  
榎櫃の実一笑塚に日の斑揺れ  
ヒマラヤの松茸匂ふ市場かな  
座禅句碑の地震に反転能登時雨  
新米を女一俵担ぎ上ぐ

金沢 清水 英理子

母の忌や木犀の香を招き入れ  
短日や混みて静かな新幹線  
大満月地球の戦火見逃さず  
夫の余暇ひと日百個の吊し柿  
助詞一字迷ふ句作やそぞろ寒

金沢 松田 好子

冬星になるや白寿の顔清ら  
靄焼きの煙に日矢さす散居村  
ティンパニー高まるやうな冬の雷  
眼帯の外れし夫や落葉道  
走るバス追うて落葉のつむじ風

金沢 井端 久子

末枯るる鉾山跡へ日の零れ  
廃村の鍔かづみの垣の昼ちちろ  
古書括る蔵の高窓一葉落つ  
生つなく身のぼろぼろに鮭のぼる  
秋しぐれ潜り鮓屋の客となり

七尾 谷 渡 末 枝

縁側に妣の居場所や菊盛ん  
鹿の声分水嶺の石転げ  
風を嗅ぐ獵犬の眼の黝光り  
土蔵跡猿酒の甕うつ伏せに  
どぶろくの試飲の盃の輪烏塗

白山 加藤 美栄子

紅さして齡忘るる温め酒

和傘張る手元一寸秋闌くる

仮設地へ引く浪ひびき冬銀河  
金箔のツリーや加賀の冬温し  
親を恋ふ門に懸巢のほそきこゑ

敦賀 倉谷 ます美

萩刈りて翁の句碑へ陽の走る  
一角に渦もりあがる下り築  
尼寺の静けさに聴く添水かな  
暁に見廻る棚田落し水  
どんぐりや老若男女の手を渡り

敦賀 鶴田 勝子

子を寝かし宿の女の水落とす  
団栗に足を取らるる獣道  
月光に城の鯨美しき反り  
秋天へ岩打つ波の光とぶ  
蜻蛉追ふ双子に広き空のあり

敦賀 中川 雅月

藁抜きて水落としたる三町歩  
石畳大きく広げ萩刈れり  
平らかな月光に跳ね池の鯉

熱爛にするめが良しと山男  
手塩掛け夫の育てし姫林檎

敦賀 中 村

優

野地蔵にどんぐり三つ供へたり  
どんぐりの木のざわめきや猿一家  
月光に素振り千本黙々と  
月光を包み込みたる仁王門  
旅の宿雪見障子に豊後富士

敦賀 為永香月枝

農継ぎて早も三年落し水  
街路樹のこぼす団栗句会へと  
松ヶ枝の月煌煌と浪士塚  
天守閣真向ひにして蕎麦を刈る  
银杏散る百選の水汲みに来て

徳島 福島 吉美

振り返る寺の大屋根鳥渡る  
糶田を染めて夕日の落ちにけり  
本山の軋む回廊初紅葉  
文机に匂ふ新刊良夜なる  
瓜坊の転げて遊ぶ村の墓地

漬樽の糠に混ぜ込む柿の皮

徳島 村上 和義

秋刀魚焼くだけの七輪捨てられず  
寝静まる在所にほのと夜なべの灯  
何も無き父との記憶木の葉髪  
母の忌の風やはらかき秋桜  
綿菓子に笑顔を埋め秋祭

徳島 宮西 修一

秋の雲カーブミラーを流れをり  
城山は鴉のねぐら秋の暮  
烏瓜引けば真竹の弓なりに  
秋日和猫が伸びたり縮んだり  
のそり来て膝に乗る猫冬隣

徳島 平岡 功

名月を映す鏡や吉野川  
星月夜外湯楽しむ宿の下駄  
松手入れ庭師異国語飛び交はし  
白銀の芒の揺るる風の道  
脇役を貫き通す吾亦紅

石井 木内 マヤ

ソナタ弾く指たどたどし榎櫃の実  
星屑の花を散らせり金木犀  
秋日和米寿の父が魚さばく  
弟が姉に指差すオリオン座  
鮎の子畑から畑へすべり込む

小松島 岡田 あゆみ

葛の実の垂れて鎮もる射撃場  
山裾の登り窯跡ちちろ鳴く  
国分寺の礎石の窪み水澄めり  
啄木鳥や俘虜の遺せしめがね橋  
くるくると太る綿菓子秋祭

松山 入河 大河

潮風の島の豊かに蜜柑畑  
ふくよかな銀杏積もる石畳  
境内の風の織り成す照紅葉  
鐘楼に音なき音や枯葉散る  
立冬の光きりりと身の締まる

福岡 宮田 千恵子

山裾にゆれて色増す草紅葉

神主の杓のつやめく秋祭  
声大きふたりとなりぬ柿売り女  
止り木に座りなほして温め酒  
やはらかき秋の白雲大窓に

長崎 丸本 祥夫

穴まどひお岩稲荷の笹鳴らし  
砂山に触れんばかりやあきつ群れ  
鶏頭の等しく闇となりにけり  
千枚田の畔を縁取る曼珠沙華  
ユーミンを聞きしドライブ流れ星

西海 山下 敦子

ただ聞いてくるる夫との夜長かな  
雲の動きふつと止まれる小春かな  
石垣の影の動かぬ冬の蝶  
泡立てる潮目に小舟今朝の冬  
午後の日には漁網繕ふ手に落葉

宮崎 中山 宣

焼鮎の尾びれ塩吹くたつぷりと  
寝待月句を詠む夫に添ひ寝して  
山盛りの色づく酸橋家苞に

行き止まる路地に木犀芳しき  
青森の香や新米の届きたる

宮崎 中山 芳 教

雲の足西へ走りて初時雨  
追憶は冬菜味噌汁自在鉤  
病窓に手を振る朋の黒シヨール  
来し方を紡ぐ夜半の冬銀河  
透き通る点滴の管冬深む

宮崎 鳥居 達 史

爆音のバイク街ゆく神の留守  
時雨忌の句碑ひつそりとお堀端  
八絃宮崎平和台一宇塔の鑿あと冬ざるる  
老僧の節談説教小鳥来る  
シャンシャン馬曳かれて戻る冬田道

那覇 中 本 清

トーチカの闇の匂へる秋湿  
残る蚊や間口二尺の陣地壕  
濁流や羊齒冷やかに小祿墓  
新北風ミナミシキや久高島を指呼に御嶽巖  
まとひたる落葉の匂ひ雨あがる

那覇 辺野喜宝来

新北風の一直線に守礼門  
乗り換へのたびに惑ふやうすら寒  
旅靴解く上弦の月あがり  
首里小夏御轎ウチマウの影を濃くしたり  
おみくじの木箱かたむく文化の日

西原 宮 城 勉

世句友遊くを去るは厭離の極み秋夕焼  
ひと刷きの雲ほの青き十三夜  
秋深し石と見紛ふ火伏獅子  
身に沁みて今宵の妻の仮面劇  
眼脂拭くティッシュの強し今朝の冬

ペリシ 鈴 木 波 江

医王寺へ迷ふ遠路の吊し柿  
干大根吊りてお寺の案内所  
茎残る朱のてんでんと蕎麦畑  
霊山の裾の温泉の町時雨かな  
仏壇の叔父に合掌して寒暮

# 同人作品の佳句

江見悦子選

熊撃ちと長湯をしたる野分かな  
遥けき日曾祖父ちやんの早稲の飯  
庭石となりし石臼十三夜  
抱き寄せて猫と夜寒を分け合へり  
小春日や触るる墓石に師の温み  
コスモスや子供はすぐに走り出す  
鯉ひたと静まりてゐる夜寒かな  
柚子挽いで呉るる垣根の長話  
鉄鍋に湯気あがりけり鱈大根  
紅葉散る病自慢の同窓会  
一枝に風の弾力鵲高音  
伏す母の耳聞き留むる初時雨  
こほろぎの根城にしたる無縁墓  
漬樽の糠に混ぜ込む柿の皮  
眼鏡拭くティッシュの強し今朝の冬

佐藤 哲  
光岡れい子  
山本右近  
三屋英俊  
山本とく江  
穂苅照子  
下嶽孝一  
喜多尾明子  
西本才子  
恒川清爾  
荻野加壽子  
成瀬真紀子  
伊藤美音子  
福島吉美  
宮城 勉

同人会だより

同人名簿についてのお願い

「令和8年版万象同人名簿」(令和8年4月1日現在)の作成に着手しております。

つきましては、お手許の「令和7年版 万象同人名簿」記載の同人の住所、電話番号、メールアドレス等に変更や訂正がある場合、また「万象」句会一覧については「万象」誌の令和7年12月号掲載の一覧表に変更のある場合は、令和8年2月末までに同人会の沢辺たけしまでご連絡を頂けるようお願いいたします。

また、個人のメールアドレスをお持ちの方は出来るだけ登録をお願いいたします(沢辺たけしへメールでご連絡下さい)。

変更や訂正のご連絡がない場合、令和7年版の記載を踏襲することになりますのでご了承下さい。

なお、「令和8年版 万象同人名簿」の配送は4月中旬を予定しております。

皆さまのご理解とご協力のほどお願いいたします。

【連絡先 同人会 沢辺たけし】

電話 番号 090-7637-5661

メールアドレス jundayuu@xd6.so-net.ne.jp

同人会事務局

12月の「万象」オンライン同人句会高点句

- 11 大根のどこを切つても水の音 桑原優美子(東京)
- 6 五年分の文字に膨らみ日記果つ 古川 京子(柏)
- 6 熊撃ちし夜は風呂加減熱くして 南 恵子(金沢)
- 5 山ねむる磐に発破のあと深く 山本 右近(さいたま)
- 5 包丁を研ぐ手に今朝の寒波来ぬ 下嶽 孝一(東京)
- 5 赤かぶら掌丸く洗ひけり 佐藤 和子(伊勢原)
- 4 漣のやうに夜来る一葉忌 荻野加壽子(静岡)
- 4 日に研がれ風に研がれて冬木の芽 穂苅 照子(流山)
- 4 大小の渦の底鳴る瀬戸の冬 村上 和義(徳島)
- 4 能登檜葉の濡れてゐるなり籠の牡蠣 中條 睦子(金沢)
- 4 花びらに花びらの翳白芙蓉 下嶽 孝一(東京)
- 3 着ぶくれて老いが背伸ばす顔認証 山本とく江(柏)
- 3 物干しの端を間借りの吊し柿 奥 太雅(四街道)
- 3 花八つ手墓仕舞やら家仕舞 宮西 修一(徳島)
- 3 石垣にふかき鑿痕虎落笛 一由久美子(東京)
- 3 直会や襖外して麦や節 谷渡 末枝(七尾)
- 3 交はず言葉なくて落葉を踏みゆけり 喜多尾明子(日野)

(\* 句頭の数字は点数を示しています)

2月は「万象俳句会年会費」の「納入月」です  
ご理解とご協力を宜しくお願い致します。

会員・同人の皆様へ

- ① 「万象」俳句会の会計年度は、4月1日～翌年3月31日です。
- ② 振込用紙は、毎年「万象」誌2月号に挿入しています。振込用紙を紛失された場合は、郵便局備付けの振込用紙をご利用下さい。
- ③ 振込みは郵便局窓口、又はATMからお願い致します。
- ④ 振込み締切日は2月末日です。2月末日までに振込みをお願い致します。
- ⑤ 2月末日までに振込みが無い場合は、4月号以降の配本を停止させて頂きます。
- ⑥ 振込先は、郵貯振替口座番号【00230-0-103581】  
口座名「万象俳句会」です。
- ⑦ 会費は、前納制で一年分をまとめて振込みをお願い致します。
- ⑧ 金額は、  
一般会員 一、〇〇〇円です。  
同人会員 二、〇〇〇円と同人会費三、〇〇〇円の  
合計二、七〇〇円です。
- ⑨ 振込み頂いた会費は、原則として返金致しません。
- ⑩ 振込用紙の半券（控）を「領収書」と致しますので、大切に保管をお願い致します。
- ⑪ 振込手数料は「ご本人」負担とさせて頂いております。
- ⑫ 同人会費（三、〇〇〇円）は、後日、同人会会計口座へ纏めて振替えます。

万象俳句会 会計担当 松浦 陵保  
万象同人会 会計担当 小池 清晴

最近の名句集を探る

遠藤容代「明日の艶」

大塚 凱「或」

若林哲哉「漱口」

今月の星  
佐藤 風十宮崎斗士

巻頭三句

横澤放川／藤田直子

佐藤文子／高尾秀四郎

菅野孝夫／中矢温

四季吟詠選者読詠新作10句

杉田菜穂／森田純一郎

山下幸典／尾池和夫

古田紀一／河原地英武

坂口緑志／井上弘美

俳句と短歌の10作選集

外山一機十平岡直子

ひとと作品

高松守信「思郷」

「馬酔木」吟行記

丹羽啓子

司会・筑紫馨井  
大西 朋  
小川 楓子  
抜井諒一

好評再選

浅川芳直

俳壇ランドスケープ

成瀬政博

とりあそびの日々

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西 朋

俳句のまなざし

橋本喜夫

俳句のレトリック

神作研一

このひらの江戸  
―古典籍を旅する―

藤村公洋

俳句のつまみ

秘矢まりえ

諸家音楽

石井隆司

たもとほろ

俳句よもやま話

二ノ宮一雄



2026年2月号

1月20日発売  
定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(十二月号)

榎本文代

朝涼や郵便受けに軽き音 林 陽子

北海道の夏はクーラーがなくても過ごせると羨ましく思っていたが、地球温暖化の影響で近年では厳しい暑さの日もあるようである。寝苦しかった夜が明けて、ドアポストに落ちる朝刊の音が聞こえた。「軽き音」に一抹の涼気の心地よさが感じられる。

星月夜湖底に青き魚ねむり 大内マキ子

秋といえば月明かりであるが、月のない夜、満天の星が輝くのが星月夜。澄み切った夜空は月夜のように明るい。北の大地では特に星が美しく湖を照らして、一種幻想の世界を作り出したのだろう。「青き魚ねむり」は作者の心象風景。それほど美しい星空だった。

金泥の墨跡擦れ秋扇 大木 茂

掲載された五句から金沢での作と思う。加賀百万石の城下町、金箔がいろいろなものに使われている。扇にも金泥で書画が描かれて豪華である。猛暑だった昨年は扇子を手ばなすことがなく金箔がすっかり擦れてしまった。しかしこれもなかなか風情があつて秋にふさわしい扇である。

巻きて散る木槿はけふを終はりたり 大内佐奈枝  
7月に入ると咲きはじめる木槿の花は、9月頃までつぎつ

ぎと咲き続ける。朝大きく開いた花は夕方には振れてしぼんでしまう。「けふをく終はりけり」に、花に寄り添った作者の思いがこもっている。

蠟涙の上に蠟涙 八月 尽 三屋 英俊

8月は夏から秋へと季節の移る月。遙か昔は死者を祀る月だったといい、仏教が伝わりとそれがお盆となった。日本の近代史をたどれば、二つの原爆の日と終戦の日の重たさがある。8月は心理的要素の強い月と思う。「蠟涙」は蠟燭から流れ落ちる蠟を涙に見立てた語。「蠟涙の上に蠟涙」のリップラインが、8月を送る挽歌のようにも思える。

コンサート終はればひとり早星 古川 京子

コンサートが終わった後、しばらくは余韻の中にいるものと思う。しかし句は「ひとり」が強調され、季語に「早星」が置かれている。最愛のご主人様を亡くされた作者は、かつてコンサートにご一緒に行かれたのかもしれない。夏の炎天続きの星空はどこかうつろである。句には作者の深い悲しみが感じられた。

おしやべりの弾みて風の猫じやらし 一由久美子

「猫じやらし」は「狗尾草」の副季語。この穂で猫を戯れさせて興じることから付けられた。野原や道端などいたるところに生えて、子供たちが学校帰りに穂を摘んで遊んだりもしている。楽しそうにおしゃべりしているのは若いお母さんたちのよう。吹き通る風が心地よく、爽やかな季節である。

仕舞湯を落として終る厄日かな 大久保 進

歳時記によると「厄日」は「立春から数えて二百十日、9月1日、2日に当たる。ちょうど稲の開花期を迎え、台風の襲来も多くなるので、この日と二百十日は農家の厄日とされている」とある。穏やかに過ぎた一日を思い、作者はゆつたりと仕舞湯に浸っている。

白挽く手母に重ねて夜なべせし 海野みち子

「夜なべ」は秋から冬にかけて夜長の時間に昼間出来なかつた仕事の続きをすることで、機械化の進んだ現代ではあまり聞かなくなつた。句は、母を手伝つて白を挽いた小さい頃の思い出。農作業で荒れている母の手に重ねた少女の手。句からは母への思いが溢れるほど伝わってくる。

ラジオより演歌秋刀魚の腸焦がす 藤原千代子

不漁が続きここ数年は高級魚のようだった秋刀魚。昨年は豊漁で食卓に上ることも多かつた。脂ののつた秋刀魚は塩焼が手軽で美味しい。焦げ目が美味しさを引き立てるので焼き加減に気を配りたいが、腸まで焦してしまつたという。聞きほれていた演歌はなんと曲だったのでしよう。

白亜紀を掘り少年の夏終はる 成瀬真紀子

「白亜紀」は地質時代の一つ。気の遠くなるような大昔、アンモナイトや恐竜などが栄えた時代である。そうした恐竜の骨が見つかった福井県には恐竜博物館が出来、大学では恐竜の研究をする学部もあるという。発掘は今も続いている。子供たちも夏休みに発掘作業に参加したのだと思う。「白亜

紀を掘り」には、少年の夢とロマンが詰まっている。

呑み足りし赤子のうす目秋うらら 豊田高子

授乳のあとの赤ちゃんはすやすやと眠りに入ることが多いが、うす目はまた愛らしい。「秋うらら」は心が解けるような安らぎを持った日和という。カーテン越しの日差しは明るく澄んでいる。健やかに大きくなりますように。

鍵盤を叩くだけの子葡萄好き 松下信子

葡萄は品種改良が進み種類も多く、高級品だったマスカットなども食卓に並ぶようになった。掲句の葡萄好きの女の子は1歳くらいかなと思う。ピアノの椅子に座ると勢いよく鍵盤を叩いて嬉しそう。女の子を囲んで楽しそうな家族の様子が見えてくる幸せな句。

青鷺の片脚折りて小半時 丸本祥夫

川や沼などの水辺で見かける青鷺。青灰色の大きな鳥で、じっと立っている姿が印象的である。「片脚折りて」は動き出す姿勢と思うが、それから小半時(30分)、片脚のままじっと動かなかったよう。青鷺の習性がよく捉えられている。

新北風や山羊汁届く上棟式 中本 清

「風歳時記」には「寒露の十月八日ごろ沖繩では快い冷やかさの北風が吹く。これを新北風と呼ぶ。寂しさを誘う風である」と載っている。暑さが少し和らいだ頃、上棟式のあとに山羊汁がふるまわれた。山羊汁は野菜を入れて煮込んだ豚汁のようなもの。沖繩ではお祝い事などで人の集まる時に作られているようである。

石路の花

桔梗

純

友と来し思ひ出あまた石路の花  
瀬戸内の汐のかをりや冬夕焼  
白障子欄間は富士と松原と  
冬晴や挽ぐ金柑の小粒なる  
潮に映ゆ対岸崖の冬紅葉  
朝日中牡蠣積む舟のモーター音  
牡蠣打場杭に鷗の落ち着かず  
落葉掃く枯山水の池の中  
山茶花のはらりはらりと石灯籠  
仏壇を閉ぢて冷たき風の中



広島の河口近く石路の花  
咲く父の愛した家がある。  
句友との旅の拠点として  
何度訪れたことか。四国、  
岩国、山口、鹿児島、宮島  
江田島等々。今は年に一度  
帰り、その間癒されている。  
里近くの懐かしい友と語  
らい、姪たちとの語らいで  
は、楽しかった出来ごとば  
かりで時間を忘れる。  
仏壇を閉じながら「また  
来ます」と。はたしてこれ  
から何度行けることか。思  
い出のいっぱい詰まっている  
旧家です。

記紀の道 中山芳教

初景色産土の千木空に溶け  
初御空日は須く記紀の道  
女狭穂塚春の彩り郊祀壇  
丘陵の円墳遙か桜雨  
万緑の包む御社殿朱の柱  
拝殿の奥つ神鏡木下闇  
星月夜照らす日向ひむかの記紀の道  
鵜戸宮に黒潮満ちて秋麗  
おもて様連れて道行神楽宿  
奉者ほしやどんの汗の肉叢神楽堂



被詞には宮崎市の地名の、ひむか、橘、小門(小戸)阿波岐原があります。「古事記」「日本書紀」の時代からの地名そのままなのです。迹迹芸命と木花咲耶姫、大遠理命(山幸彦)と豊玉姫、鵜葺草葺不合命と玉依姫命の日向三代もこの時代のことで、神代そのものの地名が今も生きています。宮崎県で最初に国の重要無形民俗文化財に指定されたのは銀鏡神楽でした。宮崎県内には200以上の集落に神楽があります。神楽は神を祀るための神事芸能のことです。

## しぐるる

喜多尾明子

黒雲の奥の青空 遠刈田

作者の言葉にもあるように11月は難しい季節である。近年四季ではなく二季と言われるように春や秋を忘れてしまったかのよう。またその時分は天候もはつきりしない。寒々とした黒雲に覆われたかと思うと急に強い日射しに見舞われる。微妙な空模様を気にかけてつつも広々とした刈田を望み一句に仕立てた。

三段をはづみて 猛し冬の滝

滝の勢いが中七の「はづみて猛し」の斡旋により読み手に伝わってくる。他の冬の滝に比べて水の落下の迫力や周りの冷たい空気感もしっかり描き出された。

冬の日やこけしに細き目を入れて

こけしは江戸時代後期に椀や盆などの木製の生活用品を作る「木地師」と呼ばれる職人により東北の温泉地で生まれた。土産物として、子供たちの遊び道具として喜ばれたが、昨今は大人のコレクターに人気と聞く。

作者はこけし作りを見学。面相筆での目を入れる瞬間を切り取った。「冬の日」が良い。

しぐるるや温泉郷に橋いくつ

表題の「しぐるる」の句である。

銀山温泉は銀山川の両側に木造三層、四層の旅館が軒を連ねている。大正浪漫の風情溢れる街並みは一幅の絵を見ている様だ。「しぐるる」がその空気感を伝えてくれている。残念なことに伺った事が無いが、是非訪れてみたい。

## 登呂遺跡

本多ひとみ

初鴨や登呂田の畦のぬかるみに

静岡ではおなじみの登呂遺跡は竪穴式住居や高床式倉庫などの復元施設以外に古代米の栽培をしている。その田圃には様々な昆虫や鳥たちが集まってくる。

そして鴨の渡りは9月ぐらいから始まり、シベリア方面からの中継地、越冬地として池や沼に飛来する。初めての飛来を見つけた作者はさっそく句にした。「ぬかるみに」で類想感を免れた。

数珠玉を握り幼き日の記憶

数珠玉は秋になると灰白色、茶褐色、セピア色、黒褐色のホーロー質の固い実をつける。

色も勿論だが「握り」の感触から幼い日に遊んだ楽しい記憶がよみがえったのだろう。糸を通して首飾りなどを作った懐かしい日々がこちらにも伝わってきた。

ちちる虫人の入らぬ草の徑

ちちる虫は蟋蟀の古い異名。「万葉集」では鳴く虫の総称だったそう。虫の中でも生活感がありなじみ深い。「人が入らぬ」からは、草丈も高く鬱蒼としている景が浮かぶ。その中から間違いないちちる虫の澄んだ声が聞こえてきた。親しい人に出会ったように。

秋霖や藁葺き屋根の茶褐色

秋霖はじとじと降り続く秋の長雨のことである。中七下五からこの句を因果と捉えてしまうかもしれない。しかししっかりと写生された句。年月を積み重ねた人々の暮しがそこにある。「秋霖」の季語が動かない。

## 私のこの一句

花散らす風狛犬の阿が呑めり 加藤季代

掲句は令和4年の「万象」誌7月号に載った5句の内的一句である。この句については「狛犬が風を呑んだ」等と現実には有り得ない事を断定してよいのだろうか、写生の本意にも反するのではないかと随分悩んだのだが、何故か捨て難く冒険の積りで10句の中に入れて投句したのであった。内海先生は「阿が呑めり」で俳句が成立したと話してくださった。そのお言葉に眼前の霧が払われた様な何か吹っ切れた様な感じもして、俳句がいよいよ奥深く楽しいものになった。そしてこの句は私にとって忘れられない大切な一句になった。

土雛の今にも笑ひ出しさうな 高橋ひろ

何時の大会か忘れてしまったけれど金沢駅近くのホテルだったことは確か。参加はしたものの、その華やかさに気後れしてホテルの裏廊下展示に来ていた。薄い電灯に錆びた鉄力の自動車だの独楽だの凧だの並ぶ古い時代が有った。中でも一体の女雛さま、煤けていてもおらかな微笑みは絶やさずどっしりと落ち着いておられる。

人の気配に振り向いたら大坪景章先生も雛を見ておられて、「さて、時間だぞ、戻ろうか」と。

追ひかけてほしくて走る裸の子 成瀬真紀子

令和5年「万象」全国俳句大会の応募作品の中の一句。

孫の育児の協力を頼まれる生活の中で、孫の俳句を多く詠んできた。孫俳句に陥りがちな「あるある」に気を付けながら大切な記録として俳句に詠んできた。この句は故内海良太名誉主宰の特選を頂いた。「この句は二、三歳の裸の子。暑さを凌ぐためではなく、湯上がりか、着替え途中の裸の子。親が着せようとすると顔を面白がって逃げ回る。追いかけると声をあげて益々逃げ回ると、評してくださった。内海名誉主宰の柔らかな笑顔と共に記憶に残る句となった。

ねんねこの笑ふ子の頬涙あと 宮崎知恵美

平成17年に佳句を選んで頂いたこの句は、万象に入って二度目の投句でした。俳句を始めて間もない頃で、何を見ても指折りながら作句していました。

近所に、お祖母ちゃんがいつも子守をしている小さな姉妹がいました。愛想の良い子たちでいつも微笑んでくれるのですが、その時はやっと泣き止んだばかりで、頬にはまだ涙のあとが残っていました。見たままの句ですが、佳句を選んで頂き、作句に少し意欲的になった気がします。

進歩もあまりありませんが気長に俳句を楽しみます。



子規の写生論の展開 (三)

高木良多

二 子規の投影

では、子規自身この一年間にどのような俳句を作ってきたか、子規俳句の特色を抽出してみると、子規の俳句の中にも、印象明瞭な句と時間性のある句とがあることがわかってくる。大別して例句を挙げると、

印象明瞭な句、

春雨や傘高低たかひくに渡し舟  
行列につきあたりたる燕哉  
五月雨の合羽つ、ばる刀かな  
夕立や並んでさわぐ馬の尻  
釜かまつけて飯粒沈む清水かな  
秋不二や異人仰あが向く馬の上  
湖をとりまく秋の高嶺哉  
幕吹いて伶人なはいじん見ゆる紅葉哉  
水鳥や菜屑さいせつにつれて二間程

時間性のある句

歌書俳書紛然として昼寐ひるまかな  
汗ふく親銭数ふる子舟は着きぬ  
戸の外に筵しじょう織るなり夏の月  
行列の草に隠る、夏野かな  
夏川や中流にしてかへり見る  
御門主の女むすめ俱ともしたる蓮見哉  
山門をぎいと鎖とぎすや秋の暮  
稲の花人相書のまはりけり  
老僧の爪の長さよ冬籠

このようにみてくると、子規のもっている両面のそれぞれ一面ずつが碧・虚の作品に投影されていると解すべきであり、碧・虚の二者は明治二十九年における新調の原動力であったが、そのみなもとは子規の指南によるものであると思うのである。

(次号につづく)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ③

橋本 清

世の中は 空しきものと 知る時し

いよよますます 悲しかりけり (五・七九三)

色即是空、この世界は何もかも空だ。生や死にしても一時の現象に過ぎない。執着すべきものではないのだ。以前はただそう考えていただけであったが、確かにその通りだと、今こそ身にしみて悟った。だが、それによって少しは心が軽くなったか。いや、それどころか、ますます悲しみがこみ上げてきて、はらわたがちぎれそうになり、涙が流れ落ちてやまないではないか。

書簡にある、「独り断腸の泣を流す」は、漢文によくあるような単なる文飾ではないでしょう。どんなに崇高な思想も空腹には勝てないように、身の内から湧き上がってくるものは頭で抑えることができません。それに伴う涙のような生理的現象もまたしかり。

大空の塵とはいかが思ふべき

熱き涙のながるるものを (「相聞」明治43年)

鉄幹と謝野寛の作です。

人間など大空に漂う塵のようにはかなく、つまらないものだとか。なるほど、それはそうかも知れぬ。だが、こう

して身の内から湧いてくる情熱と、それに反応してこぼれ落ちる熱い涙を、どうしてつまらないものだと思いなすことができようかというのです。私はこの歌に、はるかなる時を超えて旅人の歌と響き合うものを感じます。

鉄幹の父は西本願寺の支院の僧侶で、鉄幹も明治22年、西本願寺で得度の式を挙げています。仏教思想にも一定の理解があったわけですから。

「悲しかりけり」のカナシは、思いが胸にこみ上げてきて切なくなる状態を表す形容詞です。だから、悲哀の情に限りません。

多摩川に さらす手作り さらさらに

なにその児の ここだかなしき(十四・三三七三)  
「多摩川にさらす手織りの布。そのサラスのサラではないが、今さらのように何だってお前のことが、こんなにもいとしくてたまらないのかねえ。」

後朝の別れなど、いよいよ別れる時になって、男が女に与えた歌でしょう。英米人ならこんな時、アイ・ラヴ・ユーで済ますところを、万葉の男は随分手の込んだ愛情表現をしたものです。

「この児」のコノは、自分のすぐ側にあるものを指します。したがって、「この児」は今、自分の目の前にいるわけで、二人称で訳すと感じが出るところです。



## 道しるべ

静岡 杉山巳代

自宅の半径一キロ以内にコンビニが6店舗ある。その中で私の最寄りの店は静岡大学前店である。自宅から徒歩5分の店だ。夕食の準備に牛乳が足りない。夏の夕方散歩の帰路、今夜のビールはコンビニ限定で。句会の用紙をコピーしよう。郵便ポストもここが一番近い。各種料金支払い、チケット購入等々実に便利に利用している。何よりこの店のすぐ側には夫の眠る墓がある。そこは檀那寺の離れ墓地でこの地区の先祖の方々が多く眠っている。夫が亡くなって7年。彼の友人たちにお墓の場所を案内する時、このコンビニが道しるべとなっている。四季

折々装いを変える店を横目に、季節の花を携えて墓参の道を行く。それはこれからも続く私の日々の道しるべである。

## コンビニ活用術

那珂川 高山ひさ子

我が家の近くにはコンビニは5軒あるが、普段の買い物は近くにスーパーやドラッグストア、生協があるので、年に数回チケット代の支払いに行く以外は殆ど行かない。

姉夫婦は定年後、東京から茨城に移り田舎暮らしを始めた。周辺にはスーパーもコンビニもなかった。数年前家を引き払い、終の住処となる福岡の高齢者マンションに移った。すぐ近くに大型スーパー、コンビニもある。89歳の義兄はコンビニがお気に入り、ウォーキングを兼ねて好物を買いに行く。又、娘の友人夫婦は、喧嘩をすると思那さんが頭を冷やしに、車でコンビニに行くそうだ。

買い物その他に様々な活用術があり、コンビニエンス（便利）の言葉通りだ。

## コンビニの彼女

門川 請関ゆかり

近所のコンビニが閉店した。通勤途中にあり、たまに利用していたその店には、とても感じのよい店員がいた。いつもにこやかで、誠実に対応してくれる。適度に明るく少し高い声で「ありがとうございました」と言われると、いい娘だなあとうれしい気分です。出ることができた。

働いていた店がなくなり、彼女はとうとう解雇された。解体工事が進む店の前を通るたび、私は彼女の事を勝手に心配していた。

店のあった場所が更地になってしばらくたった頃、ふと立ち寄った隣のコンビニに、なんと彼女の姿があった。変わらぬ笑顔と素敵な挨拶。思わず「〇〇店で働いていましたよね」と声をかけたら驚いていましたけれど……。やっぱりいい娘だ。上機嫌で店を出た。

## とても便利とても便利

札幌 杉山和廣

思い出す事があります。私の小さな頃に、十円玉を手握って近くの商店に行った事です。長い時間をかけて駄菓子を買って、3個買っていました。今考えると、よくその主が付合ってくれたと思います。又、私の息子も金額が違いますが、近くの商店で同じ事をしていました。その商店はもうありませんが、そこのおばさんに会った時には息子の消息を聞いてくれます。

今は家の近くにコンビニが2件あります。つまり小さな商店は無くなりコンビニがその機能を果たしています。現在では食料品を中心に生活全般をカバーするようになっています。弁当、パン類、ドリンク等々。しかしこの便利さを買う事により失った物もあります。それは、食を中心とした近隣との会話、家族の団らんの一部かも。

## コンビニ

富士 神田美穂子

コンビニの歴史はアメリカで始まり、水を販売する店から、食料品や日用品を扱う店へと発展した。日本については諸説あり、1969年大阪府豊中市に開店した「マミー豊中店」や、1974年に開店した「セブンイレブン豊洲店」が日本型コンビニエンスストアの一号店とされているようだ。

2025年10月時点で日本のコンビニの数は57170店だとか。郊外にある我が家から徒歩5分圏内にも3店があるが、運転免許を返納した折には便利に使うことになるだろう。

さて、コンビニを詠んだ句を検索したところ、現在俳句総合誌などでも活躍中の40歳代のお二人の句を発見。

コンビニのおでんが好きで星きれい 神野紗希  
ローンにいてはつゆきとなりけり 涼野海音

## 縮んで膨らんだ話

志木 中村千久

外国人による日本文化論として広く読まれた李御寧の「(縮み)志向の日

本人」が出てから、かれこれ40年になる。盆栽然り、文庫本然り、果ては駅弁までが狙上に乗せられた。

隣国の学者が喝破した通り、縮めることは日本人の得意技で、それは言葉の世界にも及んでいた。

デパートメントストアをデパートにしたかと思うと、その地下売場をデパートと、更に縮めてしまうのであって、これはすでに芸の域に達している。今回のお題の「コンビニ」もそうしたひとつということになる。

昼夜にわたって商品を販売することが受けて広がったコンビニだが、今日では様々な分野をまかなうようになった。縮んだ名前とは逆に、その業態は膨らみ続けているようだ。

## 「万象ノオト」投稿募集

▽6月号「自転車」(2月末日締切)

▽7月号「トマトケチャップ」

(3月末日締切)

▽長さ さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

## 巻頭作家（二月号）プロフィール



高野翠子

（東京）

高野翠子さんは昭和3年東京に生まれ、3歳でお父様の仕事先の満州に渡りました。昭和18年、女学校2年の時に帰国、3年生からお姉様と同じ女学校に通いましたが、戦時中のため4年生で繰り上げ卒業となります。24歳で結婚、二人のお子様にも恵まれました。東京での生活の中、自然豊かな所に住みたいというご主人のたつての希望で伊勢原に居を移します。

俳句へのきっかけは朗読のボランティアで一緒だった井上玉枝先生のお嬢さんから熱心な誘いを受けたからとか。玉枝先生の伊勢原句会に出席、平成10年「風」に入会されました。

平成14年「風」から「万象」に移行、伊勢原南句会、鶴巻句会にも積極的に参加。苦しみつつもこの頃から作句が楽しくなってきたとのこと。

古りし家に年重ねけり春炬燵  
お二人の穏やかな生活が続きましたが、新東名の用地買収の為川崎に転居。ご主人の介護をしながらの遠距離句会となりました。しかし、看病の甲斐なくご逝去されました。深い喪失の中、心の支えとなったのが俳句でした。

20年、玉枝先生が体調をくずされ、後を引き継がれた山崎祐子、吉中愛子両先生に指導を受ける事になります。

24年、大坪景章主宰選の四句と佳句に。地道に取り組まれた成果でした。

秋ともし夫の病床日誌読む  
旅予定決まりて夫の墓参り  
秋燕紙一枚の店じまひ  
ありがたうの一言遺し秋海棠  
山崎先生が退かれ、吉中先生の指導

となり、万象作品の佳句欄にたびたび取り上げられるようになりました。

蟬時雨遺影にいつもの笑みありてもう一品ガラス小鉢の胡瓜もみ

また探すめがね勤労感謝の日

遣されしまま十余年冬帽子

包装の熟練の指春動く

いつも控え目でもの静かな翠子さん

ですが、パソコンを駆使して、長年にわたって句会の記録を作って下さり、伊勢原句会には無くてはならない方です。現在は東京の高齢者住宅にお住まい。今夏の猛暑の時は欠席されましたが、ファックス等で欠詠される事もなく今につながっています。

そしてこの度の待ちに待った巻頭句。何となく今日はよき日と秋の薔薇

秋日和杖曳く靴の新しく

黙す間の風ゆるやかに秋団扇

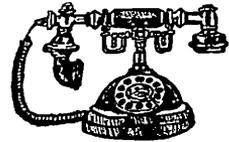
顔そろひぷりんと揺るる新豆腐

「街の無い感じたままの素直な句」と江見主宰のお褒めの言葉です。翠子さんおめでとございます。句会一同

大きな拍手を送ります。

（佐藤和子）

# 万象作品



## 江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

金木犀ポータージュースととろとろと  
柏 村田由美子

立冬の今朝の日溜り身の内に

○舞ひ落つるものの止まざる冬初め

冬に入る地に深深しんしんと今朝の雨

立ち止まる竜胆の青かたむけて  
那那 稻嶺有晃

○寄り添うて我もひと葉や落葉時

銀杏散り妻と小さき一歩かな

譲られて浅く座す席帰り花

○バジル摘む指ぬらしたる朝の露  
茅ヶ崎 久保田富士

齒の治療窓少し開け金木犀

万札の折皺目立ち文化の日

庭の花束ねて墓に小六月

胃の検診待つ間の長き小六月  
新潟 榊原キヨ子

道の辺に名残の月を惜しみけり

煮含むる冬至南瓜を甘辛く

○立冬や転舵の巨船揺れやまぬ  
玉砂利に鳩舞ひ降りぬ七五三  
横浜 岡 元枝

○石路の花庭の日陰に薄明かり

銀色の風に揺るるや枯尾花

小鳥来る一人朝餉の窓の外

代替はる生家の庭や曼珠沙華 大野城 美山留唯

客船の入港増ゆる秋日和

○どんかんと鐘太鼓の音秋高し

成田屋の睨みの凄み稲つるみ

竹千代の幼のあくび秋祭 藤岡 長谷川洋子

病院のベンチに小鳥遊びたり

○富士に雪術後の管の五六本

レントゲン板の冷やか息を止め

雨煙るニセコ連山紅葉して 札幌 石田 睦

直売所棚いっぱい芋とりどり

夕間暮れ秋雨煙る港町

車夫と行くみぞれ混りの運河かな 島崎 洋

鷹翔ぶやジェット気流に乗るごとく

閉店の手書きの知らせ秋憂ひ

秋の暮ひとり住まひにひとつの灯 杉山 和廣

薊枯れ飛ぶに飛べない綿毛かな

葛漆老樹を抱きて紅葉す

遠き日や落穂拾ひて母とある 杉山 鈴子

淋しとも夢とも言へぬ枯野かな

風立ちちて色葉一塊疾走す

菊全部切りて嵐に備へけり 札幌 園田鶴子

○蝦夷栗鼠の頬の膨らむ冬支度

石狩の風と日に干す懸大根

栗の毬とどめて速き流れかな 竹重 富子

庭仕事の音のみ聞こえ暮易し

戦争の慰霊碑に飛ぶ雪螢 田邊 政代

わが町の史跡の文字に散る紅葉

法堂のジャズのビートに秋惜しむ

冬草を食む道産馬の首太し 土門 一平

東京へ秋のフライト句友待つ

○水たまり避くるスキップ秋日和

市街地に牡鹿一頭紛れ込む

鯛焼や餡の熱さに口すほめ 土門 一

熱爛の胃の腑を通る夕餉かな

小春日の豊平峡は黄に染まり

新米におかはりの声聞こえさう 船橋 明美

圧巻の大屋根リング秋の色

光満つる名月を連れ客来る

色づくも見上げぬままに落葉道 船橋 明美

寄鍋やあれもこれもと二人前

木枯におでこ丸出し前のめり  
新庄の盆地秋色すすみけり 新庄 曾野部礼子

伏してなほ秋明菊の起き上がる

○ 転た寝の首の重さや秋の昼

秋晴やセツターの孫応援す 大江 安藤桂花

全集の第五巻欠け秋の雨

秋なれや眉刷毛万年青の花愛でて

遺構の浜抜けて海へと草の絮 仙台 富田洋子

五十年の鍋磨きあげ文化の日

立冬や雲一つなき蔵王嶺

○ 爪黒き体育座りの炉の主 新潟 齋藤 信

鉄塔の高さに立つや秋の虹

秋風やかしげる婆の杖の音

コスモスに鳩の羽毛のとどまれり 佐藤 幸示

○ 女子高の音程高き虫時雨

鐘楼に人無く秋の風ばかり

賢治忌や名残の茄子に味噌たつぷり 本間 悦子

夕野分袋小路を夫帰る

値を下げし竜胆の鉢並びをり

草の花轍に果つる亀悼む 山田 季聰

磯の松幹をなびかせ冬待てり

百五歳愁ひふつ飛ぶ大きくさめ

短日や箒の背はふりむかず 燕 渡辺志ま

綿虫の狂ひに狂ふひととこ

○ 初時雨軒先に売る地の野菜

草の中蠅螂斧をふり上げて 芳賀 稲川清子

秋の蛙白い腹みせ風呂の窓

秋起し裏作準備手わけして

後戻り出来ぬ吊橋溪紅葉 福武 幸子

掘りたての藪持つてけと声掛かる

○ 地を低くひくく来て落つ秋の蝶

夕日差し影もつれ合ふ草の花 栃木 飯塚キミ

船頭のテノール空へ初紅葉

につこりてふ大きな梨を家苞に 佐野 木村君子

秋明菊ひとり住む家訪ひにけり

秋うらら研修会へ乗り合ひて

秋高し国勢調査に足軽く 木村 君子

ボツチャてふ玉投げ競ふ秋日和

図書館を閉づるチャイムや秋夕日

引継ぎの数多の書類小六月

○岩の間の海星をさらふ秋の潮 佐野 仲山さよ子

鯨日和浜のラーメン屋台混む

波音に消されてしまふ鳩のこゑ

神名備の竹林の鶴甲高し

神苑の小径にほとり櫟の実

○日時計のローマ数字や冬薔薇

木犀に雨金砂子散らすごと 志木 汐見克彦

懐かしき顔に出会へる芋煮会

天狼に一番電車到着す

刑務所の塀に凭るる小春かな 森山洋之助

手を擦りて名残惜しさう秋の蠅

鷗鳴く運河倉庫の蔦紅葉

ソーラン節揃ひの法被の運動会 新座 多田英治

プランターに次々咲ける野菊かな

部屋中に桃の香広がるうれしさよ

神楽坂下駄音硬き今朝の冬 千葉 加藤浩子

ごめんねと言へぬひとこと神無月

酒蔵の威勢よき声冬に入る

廃校のメタセコイアや落葉散る 高田みや子

八海山の初雪眩し無人駅

冬うらら猿の親子に見つめられ

古書店の書棚の高し日短し 佐倉 新谷八郎

青空に実柘榴ふたつ阿と咩と

下り坂休まぬペダル暮易し

苞に土自然薯抱へ友来る 有泉正夫

蓮掘の道を教ふる泥の顔

自然薯を掘る場所秘密友の逝く

ゆらゆらと蜂を抱へて杜鵑草 杉田富美代

ロンドンには拍手喝采大相撲

二日目の雨の冷たき祭の夜 鈴木隆久

○秋灯や新書の香り枕辺に

月今宵南へ向かふ最終便

金木犀駄菓子屋の跡まだ更地 鈴木美根子

朝刊の見出しくつきり冬近し

○まだ消せぬメールアドレス秋寒し

卓袱台の肘ふれ合うて良夜かな 米田敏子

きぬかつぎ俳句仲間の手がのびる

暮早しデイサーピスの車来る

逝きし友白山茶花を愛したる

秋風に『破戒』のページめくれたり 船橋 山口秀吉

秋深し人ひとり見ぬ椅子ひとつ

試歩の数今日また増えて秋日和

大小のまがり糸瓜や路地の声

○子規庵の壁に自画像秋の声

転院に言葉さがして林檎剝く

大鷹や又も獲物に逃げらるる

ベランダに植木ひと鉢冬の蝶

小夜更けて玻璃戸越しより冬三日月

○早朝の太極拳へ掠鳥一羽

咲きつつもこぼれながらや葛の花

パリよりの友の電話やそぞろ寒

武器列ぶ平家の里に柿たわわ

移転せしダム湖の墓や草紅葉

急峻に喘ぎ岩の寒鴉

コンピニの明かり濃くなる秋の夕

立ち籠むる木犀の香や雨上がる

庭隅に夕闇まとふ鶏頭花

○竜頭捲く古腕時計文化の日

立冬や樅の木既に飾られて

泥付けしままの大根売る八百屋

鹿毛満子

石川幸子

菊岡緋路

寿多映子

渡部洋子

安藤美酒々

口の中甘くすつばい青みかん

秋暑し店の改装大売出し

新米を頂くことの気の重さ

やれやれと待ちわびたるや秋の空

初秋刀魚腹の苦味の美味であり

コスモスや白川郷の懐かしき

畦道に飛ぶ稻雀てんでんこ

職退きて友いきいきと秋耕す

山峡の空の群青柚子たわわ

どっこいしよ膝を擦りて年の垢

行く鳥のただ一鳴きに秋夕焼

新米の味試したる袋詰め

やる気湧く珈琲の香やいわし雲

秋深む十階よりの町一望

銀杏散る三連休の邸町

○しがみつくズボンの裾に藪風

空青し河原にひと群女郎花

どの家も柿すだれある高野道

冬の山天狗の下駄は一本歯

あちこちに柿輝きて和紙の里

東京

大場八朗

燕木静子

北口富栄

齊藤孝夫

高野翠子

鶴田智美

中澤桃子

街路樹の銀杏落葉の美しき色

パラソルの影の小さき真昼かな 東京 橋本紀代子

夜の道木犀の香の漂へり

泡しぶき上ぐる簾簀へ鮎下る

涼新た二胡の調べは風に似て

新涼や東山より風生まる

万博のリングの上に秋の風

○放屁虫エレベーターの壁を這ふ

本堂の読経の美声 秋涼し

雌猫のお尻まんまる秋うらら

足もとに夕闇せまる石路の花

大根洗ふ小川の流れせきとめて

短日を追ひかけてゆく郵便夫

名も知らぬ花びらひとひらことに露

○一粒が削がれケーキにのる葡萄

金木犀 I F 関数とやら学び

清潔な広間にピアノ秋うらら

信出すも待てど返なく残暑かな

重き荷を何処まで負ふか蟻の道  
秋夕焼鴉鳴き鳴きどこへ行く

秋の雨外出もせず空眺め

秋しぐれ門に旅人たたずめり

風の間に女性コーラス秋うらら 東京 宮崎正義

朝まだき啼く鳥替はり秋深し

真青なる空の果てまで刈田かな

教壇に木犀の花寄する風 調布 荒井 仁

閑寮やあけび紅葉に風が出て

ゆりの木の崩れむばかり落葉風

涼新たナイルブルーの首飾り 三鷹 植村康子

仕舞ひ時とんと来ぬまま秋籬

ガザの子の笑顔のニュース鷹わたる

小さき手ハロウィンランタン握り締め

劍豪の里よく晴るる鴉の声

現金で払ふバス代冬日和

もてなしはガラス拭きから秋はじめ

文化祭母とばあとが張り切りぬ

歌声の響くホールや秋深む

雨のあと茸の薫香漂ひて 府中 竹村晃子

いち早く唐松黄葉八ヶ岳  
信濃路やりんごがひとつ無人駅

前川 昇

平澤 一光

平子 甲奈

馬場美智子

長谷川はるみ

長谷川はるみ

冬の蝶兄の訃報を懐に日野 松原悦子

○姉逝くや綿虫肩をはなれざる

草紅葉釈迦の姿の阿蘇五岳

秋の風楽器のやうに柿鳴らす青梅 横井一美

苔むせる駅のホームに柿紅葉

谷底の小さき集落秋の色

天高し回るとんびの雀ほど横浜 大駒泰子

富士山を過るもの無し秋の晴

天窓の真中に無月あかりかな

鈴生りの洪柿熟れて鳥の声 加藤和子

曇り日や忙しく飛べる秋の蝶

雨催ひ電線二本に渡り鳥 坂本具子

きしみ行くトロッコ列車紅葉谷

○赤とんぼ群るる橋梁谷深し

鶉鳴けり柿たわわなる師の墓前 柴田雅春

むらさきの濃淡まとふ花菖蒲

薔薇の晴れベンチに人のあふれたる

十葉の香のほひたる庭手入れ 長野高朋

秋茄子妻の手練に焼きあがる

退院の一步にまぶし秋の空

ご先祖に参る坂道曼珠沙華

ばうばうと日の射しわたる枯芒 川崎 横山ユキ子

冬晴の垣に靴干すしづくかな

ポマードの父の写真や文化の日

荒畑に響く槌音葛の花 伊勢原 山本カツ子

コスモスの首くねらせて風の道

稗熟れ主不在の門構へ 松田 古谷悠紀子

綿虫の日差しに浮かれ増えにけり

爽やかや女の声のよく通る

虫の秋うつらうつらと仕舞風呂 飯田優子

大井川の堰跡を這ふうつし花 藤岡

朝顔の種をポツケに持ち帰り

梅檀草の種を掴みてやんま果つ 伊東文恵

屋台練り小萩の風に包まるる

高々と奴の手振り菊日和

そそと来てそそと去りたり蚊の名残 海野俊彦

新米の値札に見入る主婦の昼

泥んこの夕餉に急ぐ秋の暮

箱根路の途切れを知らぬ草紅葉 杉田義則

月山の芋煮の芋の丸きかな

稲妻や根継ぎ柱の深き裂

新蕎麦や口上多き山の宿

醉芙蓉の紅縮みたる宿場町

川越しの鐘や薄の土手渡る

手のひらに香りを移す花梨の実

富士を背に桜紅葉を散らす土手

冬ざれや時の鐘撞く閻魔寺

店先にきちんと並ぶシクラメン

日の薄き松の林の螢草

艶めける八雲の煙管秋深し

いくたびも無月の空を仰ぎたり

師の墓に師の声を聞く秋の雲

白髪を見入る鏡や敬老日

禅寺の雀の突く木守柿

山門の大屋根掠め秋燕

色変へぬ松を映せり心字池

足踏みの脱穀機鳴る学校田

無月なる雲のしじまに宝珠かな

主逝く庭の真白き曼珠沙華

石塊の首欠け地藏秋深む

杉山巳代

高井明子

高橋一夫

田中秀幸

内藤允昭

中澤祐一

色かへぬ松や校舎のなまこ壁 静岡 永田公香

○三番叟のからくり時計菊日和

木犀や八方にらむ鍔絵龍

夕暮の散歩秋の蚊払ひつつ

きんと鳴く鹿の一声山の朝

木犀の香り亡夫の鎮魂歌

大奴の天に伸びる手帯祭

金風に物干しのシャツ踊るやう

律の風川越し宿を開け放つ

老人ホームの真夜の灯りや秋しぐれ

穏やかな朝や鶉の声せわし

○施設にも和みて母の十一月

屋台去り路地には虫の声ばかり

救急車霧より出でて霧に入る

香りごと納屋に被さる金木犀

手伸ばせど届かぬ高さ烏瓜

落し水草も小虫もひと鉄に

庭に来て二羽の鶉鳴き合へり

出かくるにどことも決めず小春空

柿落葉友に手紙を届けたる

野崎浩子

矢野喜久江

小梁洋子

鈴木美由紀

鈴木裕一

北野陽子

見上ぐれば木々みな揺るる冬構

草原を一回りして赤とんぼ 金沢 新出祐子

空青し色を増したる金木屋

ハロウインの帽子木下にさりげなく

○解体の梁に柱に秋あかね 菅原雅子

月仰ぐ被災地の窓開け放し

秋祭半紙はみ出す祝文字

棉の実はち切れさうな口開く 田上ナツ子

間引菜を茹でたる青き匂ひかな

小春日のさざ波寄する舟溜り 廣田宏美

有るか無しの風にゆれるえのころ草

暈かむり寝間に差し込む今日の月

西空がピンクにそまる秋彼岸 宮崎恵美

W坂のぼる母と子天高し

籐籠に米寿を祝ふ林檎盛る

命日や庭の木犀満開に 能任康子

秋の蝶風無き庭をゆるく飛ぶ かほく

秋暑し衣の整理進まずに

遠くから太鼓の響き秋祭 白山 朝倉みゆき

銀杏を拾ふや背の丸くなり

新蕎麦を献納の禰宜摺り足で 白山 鶴尾正江

降る雨に尾花は銀を燻すごと

木の椀にはかほか匂ふ栗の飯

秋茜風の軽さを群れ飛びぬ 敦賀 川口和代

青竹に跳ぬる銀鱗下り鮎

露時雨飢餓に苦しむ無辜の民

置き去りの歟月光に濡れてをり 奈良 町田すみれ

愛用のギター爪引く星月夜

榎櫃の実鈴生りとなる中宮寺

裾分けの栗飯に足る夕餉かな 徳島 林 早苗

○つなぐ手を離れ走る子彼岸寺

竹林の朽葉踏む音やさしけれ

ぐわぐわと餌をねだるか冬鴉 山本晴美

一雨の一雨ごとに深む秋

ヒレステーキ膳に銀婚式の秋

台風の過ぎたる夜の月光る 山本瑤子

上り来し大屋根リング風さやか

○ガンダムの突き上げし腕秋天へ 鷗猛り女性総理の誕生す

秋灯下夫の目薬匂ひたる 小松島 田上幸子

弾痕の残る鉄橋葛紅葉

新松子砲台跡に波しぶき

淡路島満月美しき旅の宿 福岡 園田清子

秋うらら幼馴染の四人旅

山粧ふ北へ北へと新幹線

湯豆腐や京都の寺の滋味あふれ 鶴田輝代

瑞々しき稲穂広ぐる裂田かな ※裂田……日本書紀にある神田

枝豆の歯応へしるきにぎり飯 那珂川 高山ひさ子

ほの温きあんぱんのへそ照紅葉

渡り切る大吊橋や山粧ふ

○持つてかんねと高千穂の柿と栗 門川 請関ゆかり

子ら駆けてきちきちばつた跳び上がる

弁当を食ふ子の頭鬼やんま

ハロウィン仮装あふるるシャッター街 国富 山口孝治

幾度も残り数へて栗剥けり

栗飯や無言で妻と食したる

校庭の隅に一輪彼岸花 那覇 大城末治

首里杜に声の細きは秋の蟬

鷹渡る日よふる里の休め畑

城跡に残る野面や秋夕焼 那覇 高嶺容道

ふるさとの友又逝けり木の実踏む

新北風や鞆ひとつの島の旅

御嶽道落葉夕日を濃くしたり 宜野湾 宜野 顕

日曜の基地のしづけさ鶴猛る

天蓋に風のしるべや鷹渡る

白秋の野に鶏冠の立ち通す ベリ 森尾 舞

秋時雨なほしきりなる微熱かな

世田谷の路地にひつそり曼珠沙華

古道具屋の店主とだべり秋日濃し



〈新会員のご紹介〉

12月の加入者です。

石川直樹様 静岡県静岡市

奥川裕美様 静岡県静岡市



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所にのぎ偏(禾)の漢字を入れましょう。

- |    |                                  |       |
|----|----------------------------------|-------|
| 1  | 董□な小さき人に生れたし                     | 夏目漱石  |
| 2  | 彼一語我一語□深みかも                      | 高濱虚子  |
| 3  | 草の□も星灯るなり出雲崎                     | 加藤楸邨  |
| 4  | 蜜豆の寒天の□の涼しさよ                     | 山口青邨  |
| 5  | 曼珠沙華どれも腹だし□父の子                   | 金子兜太  |
| 6  | 水浸く□陰 <small>ほと</small> まで浸し農婦刈る | 沢木欣一  |
| 7  | 能登麦□女が運ぶ水美し                      | 細見綾子  |
| 8  | □田に紙ヒコーキが不時着す                    | 内海良太  |
| 9  | 河童忌の夜を□妻のほしいまま                   | 飛高隆夫  |
| 10 | 少年に董の咲ける□密の場所                    | 鷹羽狩行  |
| 11 | 初□古音色漏れくるめでたさよ                   | 稲畑汀子  |
| 12 | まだもののかたち雪の□もりをり                  | 片山由美子 |

【正解】

- |   |   |    |   |    |   |    |   |
|---|---|----|---|----|---|----|---|
| 1 | 程 | 2  | 秋 | 3  | 穂 | 4  | 稜 |
| 5 | 秩 | 6  | 稲 | 7  | 秋 | 8  | 稽 |
| 9 | 稲 | 10 | 秘 | 11 | 稽 | 12 | 積 |

おいしい俳句

第12回 嵐山光三郎

晩秋ジントニツクおいしいです 川上弘美

前書に「泉鏡花賞受賞一句」とある。平成二十八年、川上弘美さんが『大きな鳥にさらわれないよう』（講談社）で第四十四回泉鏡花文学賞を受賞されたとき、金沢市で開かれた表彰式のと、市内のバー倫敦屋で詠んだ句。倫敦屋は山口瞳氏ほか文人が集る古い店で、店の主人戸田宏明氏はヒゲをはやした粹人である。川上ワールドの理系小説の森に入ると、夢の海に溺れそうになる。14編の短編でつながっていて、分数のきょうだいの「あたし」は「15分の8」という名前だ。兄たちの名は「15分の3」「15分の5」「15分の6」という。川上さんは父親が富山市出身で、北陸新幹線で日本海を見たとき「晩秋の海を見てより小半時」の句を得た、と披露した。

村松友視氏や私は倫敦屋へ駆けつけて祝杯をあげたあと、オーナーの戸田バーテンダーが短冊をとりだして「いまの御気分を一句」と所望した。図々しいオーナーだな。川上さんは涼しい顔でジントニツクをジーンと飲み、短冊を差し出した。その句のことは忘れてしまったが、令和六年刊の川上弘美句集『王将の前で待つてて』（集英社）にこの句が掲載されていました。

# 万象作品の佳句

江見悦子

舞ひ落つるものの止まざる冬初め 柏 村田由美子

「舞ひ落つるもの」とは何だろうか、風に舞い地上に落ちて来る諸々の落葉なのか、或いは目には見えない何かなのかもしれない。作者は初冬の空気と時間に浸り、一体化しているようだ。詠む対象であるモノが具象から抽象へと変わる中で、普遍的な世界を掴もうとしている。

寄り添うて我もひと葉や落葉時 那爾 稲嶺有晃

作者が寄り添っているのは人。心の通じ合った恋人か、友人か。落葉の降る中において「我も落葉の中の一枚の葉に過ぎない」と己を客観視し慨嘆している作者。落葉時は人を詩人にする。

バジル摘む指濡らしたる朝の露 茅ヶ崎 久保田富士子

朝食のサラダに入れようと、庭のバジルを摘んでいる作者。朝露がまだ残っていて濡れた指からは新鮮なバジルの香りが漂う。瑞々しい句。

立冬や転舵の巨船揺れやまぬ 新潟 榊原キヨ子

港の光景。これから荷を積むタンカーだろうか。舵輪を回して針路を変えた巨船が揺れ止まずにいる。冬を迎えた巨船が武者震いをしているような力強さを感じる。面白い場面を句にした。

石路の花庭の日陰に薄明かり 横浜 岡 二元枝

石路の花の鮮やかな黄色は冬の到来を思わせる。思いがけない場所で見かけることも多く、物みな色を失った季節にひとときわ美しさが目立つ。掲句は庭の隅に咲く石路の花、何時ごろだろうか。夕方が近づき日が衰える頃、日陰のその場所だけがまだ薄明りを保っている。石路の花の静けさ、自然な有り様が好ましい。

どんかんと鐘太鼓の音秋高し 大野城 美山留唯

太宰府天満宮では毎年様々な祭りが開かれる。地元の人たちからは「どんかん祭り」として親しまれている神幸大祭は9月の5日間にわたって行われる大事な祭りである。「どん」は太鼓の音、「かん」は鐘の音だそうで、地元に住む美山さんのお話ではその音が鳴り響くと秋になったと感じるといふ。「秋高し」の季語がふさわしい。

富士に雪術後の管の五六本 静岡 長谷川洋子

手術を済ませた身体には5、6本の管がつけられ、身動きのできない作者だが、窓を見上げれば雪の富士山を望むことが出来る。無事に手術が終わった安堵感と、雪の富士に励まされてこれからまた頑張ろうという思い。「管の五六本」と具体的にモノを提示することで自身を客観化した佳句。一日も早い回復を祈っています。

蝦夷栗鼠の頬らむ冬支度 札幌 園田鶴子

北海道の森林にすむ蝦夷栗鼠、本州、四国、九州にすむ二ホンリスと比べると一回り大きい。冬眠はしないが、餌の少なくなる冬に備えてせっせと木の実をとっては土の中に埋め

る。そんな時期の蝦夷栗鼠なのだろう。木の実を頬いっぱい  
に貯め込んだ可愛らしさ。季語「冬支度」が良い。

爪黒き体育座りの炉の主 新潟 齋藤 信

囲炉裏の中央に、体育座りで陣取ったその家の主人の足の  
爪が黒いことに気の付いた作者、勿論靴下は履いていない。  
体育座りとは体育の授業などで見られる、尻を床又は地面に  
つけ、立てた膝を腕で抱え込む座り方をいう。毎日の農作業  
で足の爪がつぶれて黒くなったのか、主の暮しを思いやって  
一句に仕立てた。

日時計のローマ数字や冬薔薇 佐野 義本美智江

日時計のある薔薇園とは珍しい。日時計は古代メソポタミ  
ア地方では紀元前から使われているもので、聖書にも記され  
ているとか。作者は石の面に刻まれたローマ数字に目を留め  
た。冬日が届いているのかどうか。外つ国の歴史を思わせる  
典雅な日時計、冬薔薇が美しい。

子規庵の壁に自画像秋の声 柏 鹿毛満子

根岸の子規庵を訪ねた作者の目に、壁に貼られた子規の自  
画像が飛び込んできた。墨で大きく描かれた自画像のことだ  
ろう。亡くなる2年前の作らしいが、眼は見ひらかれ、少し  
開いた口は何かを話し出しそうだ。しっかりとした顔立ちの  
自画像である。企画展のポスターにも使われている。作者は  
その絵に対面し秋の気配を感じた。子規忌も間近いか。

竜頭捲く古腕時計文化の日 東京 安藤美酒々

デジタルが主流を占める腕時計の時代であってみれば、  
「竜頭(りゅうず)」とは懐かしい言葉。懐中時計や腕時計の

側面にあるつまみのことである。作者は大事にしている手巻  
き時計の竜頭を巻きながら、今日が文化の日であることを思  
っている。つまみを巻かなければ止まってしまう時計、それ  
を気に入って使い続けることも文化の一つだ。

一粒が削がれケーキにのる葡萄 東京 平子甲奈

大きな葡萄なのだろう。一粒が何枚にも薄く削がれてケ  
ーキを飾っている。昨年の全国俳句大会で食したデザート  
のケーキに、薄く切られたシャインマスカットが乗っていて繊  
細さに驚いたが、作者はそれを写生したのかもしれない。最  
近は店先に並ぶ果物が一層大きく美味しくなり、サンシャイ  
ンマスカットもその一つ。昭和の時代を生きた一人としては、  
種を出しながらテラウエアを食べていた昔が懐かしい。

解体の梁に柱に秋あかね 金沢 菅原雅子

能登半島地震で解体せざるを得なくなった家だろうか。ほ  
とんどが取り壊されて家の中はがらんとしている。残された  
梁や柱に秋茜がやってきて翅を休めてはまた飛んで行く。命  
のない物とある物。消えんとする物と生きようとする物。  
対照的な二つの物に実相を感じ、思いを深めている。

持つてかんねと高千穂の柿と栗 那賀川 高山ひさ子

「持つてかんね」が高千穂地方の方言、心地良い響きだ。  
差し出されたのは柿と栗、素朴なしかし本物の果物である。  
破調の句だが、17音は守られている。披露の時にはどこで切  
ったら良いのか、心したい。方言の生きた面白い句である。

新中央句会報（11月例会）

令和7年11月23日（日）東京文化会館

（出席20名）

中村 千久 選

鯛焼の一つに並ぶ襟立てて 大久保 進

汐風のつつむ梯梧の帰り花 沢辺たけし

レントゲンの板に張りつく波郷の忌 吉中 愛子

着ぶくれて語らひつきぬ師の墓前 桔梗 純

浮寝鳥離ればなれに川暮るる 榎本文代

靴下を脱いであんよの小春かな 砂地 宏子

朱を極め冬日を弾く冬青せうせいの実 内田 郁代

切株にまた入れ替はる月の客 下嶽 孝一

住み古りて障子の棧も瘦せにけり 奥 太雅

塾生を育て冬眠無名塾 安藤美酒々

㊦夕霧やもんぢやの街へ渡る橋 下嶽 孝一

㊦夕霧やもんぢやの街へ渡る橋 下嶽 孝一

掲句の「もんぢやの街」は中央区月島辺りのことだろうと思つた。運河に囲まれた一帯だから、あちこちに橋が架かっている。秋の夕暮どき、茜色に染まる霧の立ち込める情景が、

何がなしか心に染みた。

レントゲンの板に張りつく波郷の忌 吉中 愛子

胸部X線写真を撮るときの、あの黒い板に胸を押し付けたときのひやりとした感じ。それを作者は「板に張りつく」と

即物的に捉えてみせた。戦地で発症した肺結核に終生悩まされた俳人への思いから引き出された「波郷の忌」は11月21日。

「惜命忌」とも。

浮寝鳥離ればなれに川暮るる 榎本文代

晩秋に渡つて来た水鳥が川波に揺られながら羽を休めているのだろう。「離ればなれに」が季節の寂寥感を深めているように感じた。下五の「川暮るる」のわずか5音が、場所と時間を見事に言い留めている。

榎本文代 選

昼酒や熊手立て掛く床柱 奥 太雅

レントゲンの板に張りつく波郷の忌 吉中 愛子

着ぶくれて語らひつきぬ師の墓前 桔梗 純

吊るされし猪うるむ目を山に 三屋 英俊

オペ受けて片目の一步冬ざるる 長谷川 信也

木枯へ一直線や車引き 松井 宣夫

朝時雨鳥の鋭き声遠ざかる 桔梗 純

石鯛の縞くつきりと冬に入る 沢辺たけし

百日の荒行けふの小春かな 三屋英俊

色変へぬ松の鱗の刃のごとし 吉中愛子

⑩靴下を脱いであんよの小春かな 砂地宏子

⑪靴下を脱いであんよの小春かな 砂地宏子

幼児語の「あんよ」から、よちよち歩きを始めた愛らしい姿が見える。窓から射し込む暖かな日が足元に届いて、ゆつくりとゆつくりと一歩また一歩である。

レントゲンの板に張りつく波郷の忌 吉中愛子

石田波郷は胸部疾患に倒れてより、生涯宿痾に苦しんだ。

「鶴」を創刊、〈七夕竹惜命の文字隠れなし〉の句がある。作者はレントゲン撮影をしたようである。「貼りつく」に、胸を押し当てている様子が見える。11月21日が波郷の忌日である。

着ぶくれて語らひつきぬ師の墓前 桔梗 純

寒風の吹き始めた寒い日の墓参。悴んだ手を合せた後、何を話されたのでしょうか。「語らひつきぬ」から、師であった岩崎眉乃先生へのあふれる思いが伝わって来る。

### 沢辺たけし 選

西郷どんの背せみぢに小さし帰り花 長谷川信也

ハンドルもサドルも寒し帰り道 松井宣夫

着ぶくれて語らひつきぬ師の墓前 桔梗 純

オベ受けて片目の一歩冬ざるる 長谷川信也

木枯へ一直線や車引き 松井宣夫

朱を極め冬日を弾く冬青せきよこの実 内田郁代

切株にまた入れ替はる月の客 下嶽孝一

百日の荒行けふの小春かな 三屋英俊

花終寺町通りにいりこの香 桔梗 純

月光に立てかけられし高梯子 下嶽孝一

⑫住み古りて障子の棧も瘦せにけり 奥 太雅

⑬住み古りて障子の棧も瘦せにけり 奥 太雅

障子ではなく「障子の棧」に着目したのが面白い。家も長く住むと柱や鴨居など、木の部分は少し黒ずんでくるものだが、その黒ずんできた障子の棧が「瘦せ」ているように見えた。作者が「障子の棧」と自分の身を照らし合わせた感慨、だからこそその「も」である。

木枯へ一直線や車引き 松井宣夫

街路樹の葉を吹き飛ばすような「木枯し」に向かい人力車

の棍棒を手に前傾姿勢で走って行く「車引き」の姿がかっこいい。句としては、中七の「一直線」が良く、「や」で切ったのも効果的。

百日の荒行けふの小春かな 三屋英俊

千葉県の法華経寺で「百日の荒行」を行う僧の睡眠時間はおよそ3時間弱、午前2時30分に起床して、一日7回の水行を行い、睡眠、水行、食事を除いた時間は読経をしているとのこと。そんな厳しい修行だからこそ小春日和の暖かさは修行僧にとって一息つける有難く貴重なものとなるのだろう。

花柵寺町通りにいりこの香 桔梗 純

作者は「寺町」を歩いていて、香りで柵の花に気付いたのかも知れない。そんな時、今度は違う匂いがしてきた。それが寺町にはそぐわない「いりこの香」だからこそ作者の心に残ったのかもしれない。地味な句だが取合せが面白い。

今後の新中央句会の子定

▽2月22日(日) 東京文化会館 小会議室 13時より

▽3月例会は会場の都合で、通信句会といたします。

選者による後日選(詳細は3月号でお知らせします)

# 俳句

2月号  
予告

1月23日発売

巻頭作品50句 高橋睦郎  
作品21句 仁平勝・石田郷子

予価1,300円(本体1,182円)®

## 句会がすべて

特集

- ▼導入 句会ハンドブック……大谷弘至
- ▼総論 句会の魅力……山口昭男
- ▼各論 句会の手引き……今橋眞理子・山西雅子  
松野苑子・若林哲哉
- ▼エッセイ 思い出の句会/句会で学んだこと

### 追悼 伊藤伊那男

好評連載  
小林秀雄の眼と俳句……青木亮人  
はみ出せ!俳句……夏井いつき  
飯田龍太の世界……廣瀬悦哉

付録 季寄せを兼ねた俳句手帖

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

## 北から南から

## ひむか宮崎

宮崎 中山芳教

### 〔夏目漱石と宮崎〕

夏目漱石の「坊ちゃん」は、明治39年（1906）に『ホトトギス』に発表されました。その中に宮崎県延岡市について書かれている部分があります。登場人物に「古賀君」がいますが、古賀君にまつわる話が次の様にあります。

「どこへ行くんです」「日向の延岡で―土地が土地だから一級俸上つて行く事になりました」―中略―延岡と云へば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云ふ所によると船から上がつて、一日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎から又一日車へ乗らなくつては着けないさうだ。名前を聞いてさへ、開けた所とは思へない。猿と人が半々に住んでいる様な気がする。

「猿と人が半々に住んでいる」とは、山奥の様子を表現するのに誠に言い得て妙なる表現だと思えます。

### 〔宮崎への旅をどうぞ〕

宮崎日向の里に「陸の孤島」という卑下した県民自ら口にする言葉もありますが、他県とのアクセスは意外に良いと思われまます。新幹線はありませんが、羽田発の便で宮崎市に向かうとすると、宮崎空港経由で宮崎県庁まで約2時間20分。

宮崎空港は地方では珍しく、J R九州の日豊本線と接続している空港乗り入れ線を持っているため、非常に便利です。

### 〔宮崎神宮の猿糞塚〕

宮崎神宮へは、宮崎空港からタクシーで35分、J R宮崎駅より10分です。神宮の社殿に向かって第三の鳥居の右側の森の中に猿糞塚があります。説明文によると「猿糞塚とは、芭蕉の高弟であった凡兆と去来が共同で編集した俳諧撰集で、俳諧七部集の第五部に当たり、元禄4年（1691）に上梓された。芭蕉のハ初しくれ猿も小糞をほしげなり」という句が立句に使用されているためこの名が付いた」とあります。

### 〔城ヶ崎俳人墓地〕

「赤江城ヶ崎や撞木の町よ金がなければ通られぬ」の俚謡があります。この囃子唄は、かつての城ヶ崎地区が船舶の要所で、宮崎の経済力の中心だったことを物語るものです。

この地は、江戸時代から明治時代初期にかけて俳句を中心とした町民文化が栄えたところであり、多くの俳人を輩出し、「城ヶ崎俳壇」と呼ばれました。ここに俳人墓地が残されています。都には程遠いひむか宮崎の地ですが、句作の喜びを大切にしています。

他誌管見 西浄さえ

「万象」 令和七年八月号 通巻二八二号 七十頁

主宰 江見悦子

発行所・東京都杉並区高井戸東一―三―一六―一六〇三

平成一四年四月、滝沢伊代次が横浜で創刊。師系沢木欣一。即物

具象の写生を深め、森羅万象のいのちの輝きを詠う。社会性俳句を

検証しながら「新しみのある俳句」を追究している。 [月刊]

主宰作品「窓若葉」より

鳥籠降る朝たのしきアマリリス

初夏の山水走りおろし蕎麦

家刀自の古裂のてちやう窓若葉

「定家篇」より

定家宿禰身の香を放ちけり

「風宵集」より

老翁のこゑ道連れに六義園

母の日の母の笹節の引けば鳴る

館より洩れ来る時吟さみだるる

曲水の朝のきらめき燕子花

「同人作品」より

小滴や目薬さすに口あけて

瘦せの身のほのほの酔へり爰焼酎

耳朶の大きな妊婦若菜風

「万象作品」より

裸婦像の荒きへら跡草いきれ

改札の列を眼下に又つばめ

松永 博子

藤原 善明

▼主宰が「万象の窓」で「輪島の段駄籠」という言葉遊びの文化を

紹介されているが、それは既に当該にも浸透しているようで、作品

には雑字が沢山織り込まれ、最後の頁に「ルビの小函」として読

みに「てこずる」65個の説明方が掲げられている。▼同人作品鑑

賞の「佳句佳句しかじか」も雑評が深く温かい。▼「風のしをり」

「万象ノオト」等エッセイも面白い。

▼皆様の益々のご健康とご繁栄をお祈りします。

(筆者住所 〒177-0006 東京都世田谷区岡本三―一―一三―一三〇三)

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2026年 2 月号

**「俳句界」投稿欄** 一流道者10名！  
充実の投稿欄

**特集** 特別カラー  
**50代俳人**〜新たな気付き

櫛部天恩 山田耕司 佐藤郁良  
高山れおな 津川絵理子 野崎海幸  
マブソン青眼 和田華凛 関悦史  
鶴田智哉 田中亚美 成田一子  
川越歌澄 瀬間陽子 田島健一

タラシエ俳句界NOW 小川望光子

特集 うつくしい雪

- エッセイ 雪と暮らす 佐伯一麦 (作憲)
- 俳句の中で「雪」がもつ意味
- 五十嵐秀彦
- 私の好きな「雪」の句セレクトション
- 白濱一羊 高橋千草 中本真人
- 「雪」を詠む作品20句 中川雅雪

**発表！ 第16回北斗賞**

📌 推薦！注目・期待する俳人③

📌 注目の句型 志賀康『志賀康俳句集成』

運籤

宮坂静生 青木亮人 林誠司  
石井隆司 若林哲哉 広渡敬雄  
坂口昌弘 八田九郎

※一部変更の可能性あります。

株式会社 **文學の森** 申込みは… ☎ 169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

## ルビーの小函 (2月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったものの中から、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- |   |   |
|---|---|
| 3 木偶 (でく)   | 26 陵守 (みささぎもり)<br>榎櫃の実 (かりんのみ)                                  |
| 7 狭庭 (さにわ)<br>錫杖 (しゃくじょう)   | 27 鮎屋 (ごりや)<br>齡 (よわい)<br>添水 (そうず)<br>鮠 (しゃちほこ)<br>三町歩 (さんちょうぶ) |
| 8 梯梧 (でいご)  | 29 鼯の子 (いたちのこ)<br>酸橘 (すだち)<br>家苞 (いえづと)                         |
| 11 為業 (しわざ)<br>敗蓮 (やれはす)  | 30 羊齒 (しだ)<br>指呼 (しこ)<br>温泉の町 (ゆのまち)                            |
| 13 羽後 (うご)<br>*旧国名 (秋田県と山形県の一部)<br>煮麵 (にゅうめん)<br>鑊阿寺 (ばんなじ) *栃木県の名刹 | 32 発破 (はっぱ)<br>鑿痕 (のみあと)<br>直会 (なおらい)<br>虎落笛 (もがりぶえ)            |
| 14 鶉 (ひよどり)<br>賓頭盧 (びんずる)   | 37 須く (すべからく)<br>女佐穂塚 (めざほづか) *宮崎県の上埴<br>肉叢 (しむら)               |
| 18 妣 (はは)<br>馬柵 (ませ)<br>勢 (きおい)<br>七五三祝 (しめいわい)                     | 47 転た寝 (うたたね)   |
| 19 闌けて (たけて)<br>足裏 (あうら)  | 48 神名備 (かむなび・かんなび)<br>鶉 (ひよ)<br>杜鵑草 (ほととぎす)                     |
| 20 万年青の実 (おもとのみ)<br>愛染王 (あいぜんおう)                                    | 49 椋鳥 (むく)<br>列ぶ (ならぶ)  |
| 21 猿酒 (ましらぎけ)<br>橡の実 (とちのみ)<br>鋭き声 (ときこえ)<br>靡けり (なびけり)             | 51 手練 (てだれ)   |
| 22 去ぬる (いぬる)<br>衣被 (きぬかつぎ)  | 52 煙管 (きせる)<br>三番叟 (さんばそう)                                      |
| 23 懸巢 (かけす)<br>稲架 (はざ)<br>誘ふ (いざなう)<br>掃苔 (そうたい)                    | 53 W 坂 (ダブルざか) *金沢の地名   |
| 24 零余子 (むかご)  | 54 裂田 (さくた)   |
| 25 喇叭 (ラッパ)   |   |

# 北 南 西 東

## 消息等

江見悦子主宰・小林愛子名誉顧問の句

「初蝶」12月号に

真夜の夢つむぐやからずりの花 悦子

「伊吹嶺」12月号に

広島忌水甕に水あふれしめ 悦子

のうぜんの火花を垂らす石の塀 愛子

「しろはえ」12月号に

朝顔のうすむらさきや綾子の忌 悦子

初秋やシャボンの泡の薄荷の香 愛子

「俳星会」No.72

春の電枯山水の庭はしる 悦子

矢車菊ま青フアラオの棺の上 悦子

緑蔭の陶椅子に人待ちてをり 悦子

第32回俳人協会俳句大賞 入選作品

片山由美子・西村和子 選

麻服を脱ぐや葉擦れの音立てて 荻野加壽子

岸本尚毅 選

六月の磯に真水の湧くところ 前田貴美子

俳人協会栃木県支部総会・俳句大会

能村研三 特選

更衣こころを青き風過ぐる 加藤季代

「対岸」11月号「結社誌を訪ねて」に江見

悦子主宰の句

大甕の泡盛育つガマの奥

蒸留酒の泡盛はアルコール度数が高いの

で、一歩引いてしまうようなところがある。

しかし、昨今は糖質0で低カロリー、おまけに血液をサラサラにする効果も期待できると人気があるようだ。酒は適量であれば「百葉の長」と言われる所以であろう。この作品の大甕はクース(古酒)となるような泡盛を眠らせておく甕だろう。それが貯蔵用の洞窟に並べられているのである。沖繩で洞窟と言えば「ガマ」である。かの沖繩戦の時には、陣地や避難場所、野戦病院として使われていたガマである。沖繩の景と沖繩の時の流れを彷彿とさせてくれる作品である。

「伊吹嶺」に、荒川英之氏による「沢木欣一百句鑑賞」が毎号連載されており、12月号は「花八つ手」の句、大変興味深い鑑賞文です。

花八つ手いかに本郷打毀し  
(赤富士) 所収

初出「風」昭和四十四年一月。昭和四十三年の作。冬の句。季語は花八つ手。自註に「東大安田講堂が全学連過激派(筆者注)正確には東大全共闘)に占拠された事件があった。本郷の路地に咲く八つ手の花の地味な美しさが脳裡に浮かんだ」とある通り、中七の「本郷」は東京帝国大学に

通った懐旧の情を帯び、上五「花八つ手」の心象の美しさを支えている。そのキャンパスが、学生によって構築された大規模なバリケードで封鎖され、安田講堂も占拠された。「本郷」の地名表現が、こうした現実を一句に持ち込んでいるということにも留意したい。

過去に欣一は反体制運動を題材として「デモの年汗に腐りし腕時計」(昭35)の句を作り、民主主義の擁護を掲げた学生や市民による安保闘争の挫折に思いを致している。一方、掲句では「いかに本郷打毀し」と詠み、なぜ暴力に訴えるのか疑問を抱き、武装闘争に突き進む学生の心をはかりかねている。これは、大衆から遊離した学園紛争の末路を象徴する内面描写といえるが、「花八つ手」の素朴な美は、市民の指示を失って孤立化した学生に対する作者の一掬の同情を感じさせる。

昭和四十四年一月十八、十九日にかけて安田講堂をめぐる攻防戦が各局によってほぼ終日、断続的にテレビ中継され、機動隊がバリケードを崩し、学生が火炎瓶を投下する暴力的な場面が放映された。この時、欣一は「いかに本郷打毀し」の感を一層強くしたのである。

(報・編集部)



064-0808

札幌市中央区

南八条西15-1-5-904

万象作品投句係行

110円切手を  
貼ってください

氏名	住所

〈通信欄〉

## 編集後記

▽節分が近づくと、良太先生を思い出す。昨年の流行語大賞に女性総理の「働いて働いて働いて働いて働いてまゐります」が選ばれたが、晩年の良太先生は、「万象」のために命を削ってまさに「働いて働いて働いて働いて働いて」くださった。(規子)

▽毎年紅葉の時期になると皇居の中にある乾通り(坂下門から入り乾門へ抜ける一方通行)の通り抜けが始まる。驚くべきは乾通りの紅葉ではなく、路上に落葉一枚、紙屑一つ落ちていないということ。多くの人が途切れなく歩いているにもかかわらず。やはり特別な場所なのであろう。(清晴)

▽12月の東京俳句スクールは、4月に続き初冬の太田黒公園を吟行し、角川庭園の詩歌室で句会を行いました。太田黒公園は東京の紅葉お勧めスポットで、夜間はライトアップされています。近くには荻外荘があります。昭和

前期に総理大臣を三度務めた近衛文麿の旧邸でした。「荻窪会談」など政治会談が行われた日本政治史の重要な場所として、国の史跡に指定されています。(久美子)

▽先日、コンビニにオートバイを停めていたら「そのバイク何というバイクですか?」と高校生たちから話かけられました。「NSRだよ。36年前のだよ。」と答えると、一同感心し、その後バイク談義に花が咲きました。別れ際「また会ったら声かけてよ」と言う。「はあゝい」との返事。古いバイクを乗っているとよくこうした事が起きます。趣味が世代を超えるようです。(宣夫)

▽久しぶりに乳頭温泉で雪の中を歩く。降る雪の中であの頃の生活が蘇ってくる。雪国での生活の苦労はすべて父母が負い、私は子供として幸せに育った。今の千葉暮しでは雪を詠むのは難しいが、この季節の雪国温泉旅行は定番になってきた。(みや子)

### 会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一、二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230001036581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

## 万象 二月号

第二十四巻 第十一号  
通巻 第二八七号

令和八年二月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-00072

東京都杉並区高井戸東一-三一-1603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

万象 第二十四卷 第十一号 (通卷二八七号)

平成十四年十一月十三日  
令和八年二月一日発行

第三種郵便物認可  
(毎月一回一日発行)